

# 立山町埋蔵文化財分布調査報告 I

1985年度

立山町教育委員会  
富山大学人文学部考古学研究室

1986年3月

# 立山町埋蔵文化財分布調査報告 I

1985年度

立山町教育委員会  
富山大学人文学部考古学研究室

1986年3月

## 序

靈峰立山の山麓に広がる立山町は、古くより人々の生活の場として、また立山禪定に代表される信仰の場として、数多くの文化遺産を育み守ってきた所です。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中で、これらの貴重な文化遺産は次々と破壊され消滅していこうとしています。

町ではこの事態を重視し、かつ文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することが、真の地域社会の発展へとつながるものであるとする観点から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。

この報告書がより多くの方に利用され、文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施及び報告書作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、厚く御礼申し上げます。

昭和61年3月

立山町教育委員会

教育長 坂井市郎

## 例　　言

- 1 本書は、立山町教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の初年度（1985年度）の報告書である。
- 2 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、後記の調査団を編成しこれを実施した。
- 3 遺物整理・実測・製図・写真撮影は、立山町教育委員会社会教育課森秀典と富山大学考古学研究室の全員が協力して行なった。参照図版の遺物番号を統一した。
- 4 本文は宇野隆夫（富山大学人文学部助教授）森秀典、岡本淳一郎（富山大学人文学部専攻科学生考古学専攻）、岩瀬彰利・大竹豊・吉田正人（富山大学人文学部学生考古学専攻）が分担して執筆した。執筆の分担は文末に記した。なお越中瀬戸については富山県埋蔵文化財センター宮田進一氏の教示を得た。また参考文献は本文末に一括した。
- 5 編集は秋山進午、宇野隆夫と森秀典が協力して担当した。
- 6 今回掲載した遺物のうち、伝小次郎窯（山下窯）出土越中瀬戸、および伝法光寺谷4号窯出土須恵器は、吉野香岳氏より借用したものである。氏の御好意に厚くお礼申し上げる。
- 7 本書の作成にあたっては、富山県埋蔵文化財センターの諸氏、調査団顧問の岡崎卯一氏、同安田良栄氏より多くの貴重な御教示をうけた。また越中瀬戸については高岡市立博物館長定塚武敏氏の著作の学恩をこうむり、石器の石材は富山大学教養部教授藤井昭二氏に鑑定していただいた。深く感謝する次第である。

## 目 次

第1章 はじめに .....	1
1 調査の目的 .....	1
2 調査の経過 .....	1
3 立山町の地勢と自然環境 .....	2
4 1985年度調査区の地勢と地区割 .....	5
第2章 分布調査の成果 .....	6
1 遺跡と採集遺物 .....	6
(1) 口中源兵衛腰遺跡 .....	6
(2) 日中墓ノ段北遺跡 .....	6
(3) 日中墓ノ段南遺跡 .....	7
(4) 野沢大谷北遺跡 .....	8
(5) 野沢大谷南遺跡 .....	8
(6) 野沢狐幅遺跡 .....	8
(7) 野沢苦情地遺跡 .....	9
(8) 野沢籠ヶ鼻遺跡 .....	9
(9) 村上野龍ヶ浜遺跡 .....	9
(10) 日中上野東林遺跡 .....	9
(11) 白岩根骨遺跡 .....	10
(12) 白岩古高遺跡 .....	10
(13) 石坂助地沢遺跡 .....	10
(14) 白岩蔵ノ上遺跡 .....	10
(15) 白岩尾掛遺跡 .....	11
(16) 上末遺跡 .....	11
(17) 藤塚古墳 .....	11
(18) 上末古窯跡群 .....	12
(19) 日中軌使塚 .....	15
(20) 日中土壙 .....	16
(21) 日中經塚 .....	16
(22) 釈迦堂經塚 .....	16
(23) 越中瀬戸古窯跡群 .....	16
2 遺物の散布状態 .....	19
(1) 條文土器の散布状態 .....	19
(2) 須恵器の散布状態 .....	19
(3) 越中瀬戸の散布状態 .....	22
(4) その他の遺物の散布状態 .....	22
第3章 おわりに .....	23

## 図版目次

図版 1	1985年度分布調査地区航空写真	立山町教育委員会提供	2~5
図版 2	遺物実測図(1) 縄文土器・石器	岩瀬製図	6~11
図版 3	遺物実測図(2) 須恵器	吉田製図	12~13
図版 4	遺物実測図(3) 須恵器	大竹製図	13~14
図版 5	遺物実測図(4) 須恵器・中世陶器	大竹製図	14~19
図版 6	遺物実測図(5) 越中瀬戸	岡本製図	16~18
図版 7	遺物実測図(6) 越中瀬戸	森製図	18
図版 8	遺物実測図(7) 越中瀬戸	宇野製図	18~22
図版 9	遺物写真(1) 縄文土器	宇野・森撮影	6~11
図版10	遺物写真(2) 須恵器	宇野・森撮影	12~13
図版11	遺物写真(3) 須恵器	宇野・森撮影	13~14
図版12	遺物写真(4) 越中瀬戸	宇野・森撮影	19
図版13	遺物写真(5) 越中瀬戸	宇野・森撮影	16~18
図版14	1985年度分布調査地区的遺跡と遺物採集地点	宇野・森作成	19~22

## 插図目次

第1図	立山町の気候・植物帯の垂直変化	『立山町史』から	2
第2図	立山町西部の地勢	宇野・森作成	3
第3図	調査地区図	宇野作成	4
第4図	調査地区的地区割	宇野製図	4
第5図	藤塚古墳墳丘の現状	宇野製図	11
第6図	越中瀬戸窯の分布	『越中の焼きもの』から	17
第7図	甚兵衛窯の構造	『越中の焼きもの』から	18
第8図	縄文土器の散布状態	宇野・岩瀬作成	20
第9図	須恵器の散布状態	宇野・吉田・大竹作成	20
第10図	越中瀬戸の散布状態	宇野・岡本作成	21
第11図	その他の遺物の散布状態	宇野作成	21

# 第1章 はじめに

## 1 調査の目的

立山町が人の活動の舞台となったのは、現在知られている限りでは、今から約2万年前、吉峰台地においてである。以後、旧石器(先土器)・縄文時代は町東部及び東南部丘陵上、弥生時代は町北部のデルタ地帯、古墳時代以降は町中央部の扇状地というように、その生活の場は時代により変化してきているが、現在に至るまで連続と人々の営みが続いている。

従って、遺跡も多数存在しており、1972年(昭和47年)の『富山県遺跡図鑑』においては63カ所の遺跡が登録されている。そしてなお、その後発見された遺跡も多く、未発見・未登録の遺跡も少からず存在するものと予想される。

また、近年の開発行為の増加に伴ない、遺跡の保護と開発との調整が社会問題化してきており、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発との調整のため、基礎資料としての遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急がれていたのである。

## 2 調査の経過

以上の理由により、立山町教育委員会では、国庫補助事業として遺跡詳細分布調査を行なうことになった。

1985年(昭和60年)3月27日、町教育委員会と富山大学考古学研究室との会合がもたれた。その結果、町教育委員会を中心とした調査団を編成し、元立山町史編纂主任岡崎卯一氏と町文化財保護審議委員安田良栄氏を顧問に迎え、富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て実施することになった。

調査の方針としては、町域の中でも遺跡分布密度の濃い、町東部・東南部丘陵地帯及び町北半部の扇端・デルタ地帯を対象地域とし、五ヵ年計画とすること、年度ごとに報告書を作成し最終的には遺跡分布図・地名表及び主要遺跡解説等を含む報告書を刊行することが決定された。

また調査の実施にあたっては、町域を8地区に区分し、I~V地区を当面の対象地域として初年度は第I地区について調査を行なった(第1図)。

現地調査は、4月9日~5月5日までと10月10日~12月1日の間、主として土・日・祝祭日に、5回に分けて計12日間、延90人余の参加を得て実施した。

調査団の構成は以下のとおりである。

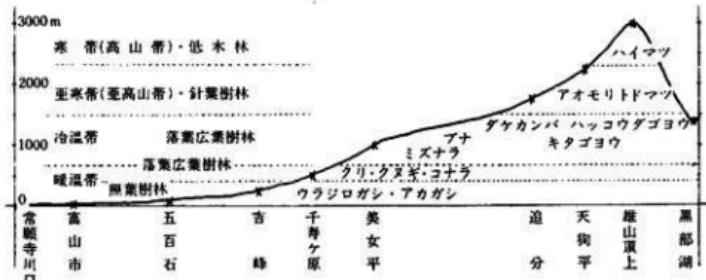
### 立山町埋蔵文化財分布調査団

團長 坂井 市郎 立山町教育委員会教育長  
 顧問 関崎 卵一 元立山町史編纂主任  
 安田 良栄 立山町文化財保護審議委員  
 調査員 秋山 進午 富山大学人文学部教授（調査主任）  
 和田 晴吾 元富山大学人文学部助教授（調査副主任）  
 現立命館大学文学部助教授  
 宇野 隆夫 富山大学人文学部助教授（調査副主任）  
 森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事  
 調査補助員 岡本淳一郎、大野 実、坂 雄志、杉本 弓子、高畠 寿恵、水野かおる、  
 岩瀬 彰利、大竹 豊、吉田 正人、坂井須美子、西川公三子、林 文子、  
 中浦 千智、大場 裕之、銀治 常昌、沢辺 利明、酒井 聖子、田島富恵美、  
 辻 礼子、針木 恵子、松本 典子、小田木治太郎  
 (以上、富山大学人文学部考古学研究室専攻生・学生)  
 事務局 中田 徳雄 立山町教育委員会社会教育課長  
 関上 寛 立山町教育委員会社会教育課長代理  
 跡治 令子 立山町教育委員会社会教育課主事  
 森 秀典 立山町教育委員会社会教育課主事

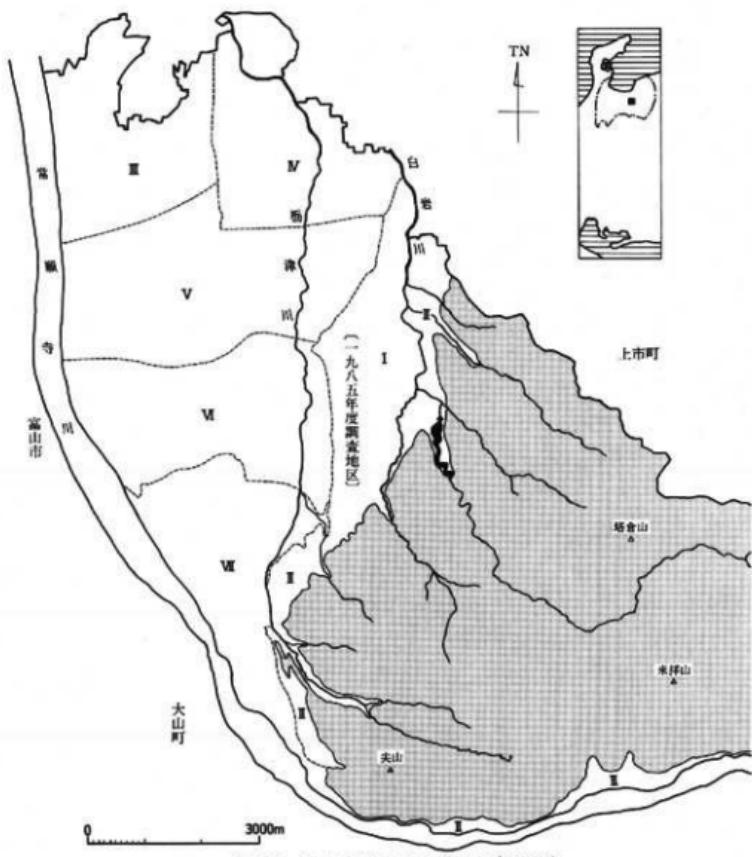
### 3 立山町の地勢と自然環境

立山町は富山県の東南に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川に沿って、細長く伸びた町である。西は県の中心である富山市に、東は後立山連峰で長野県と接し、東西約43km、南北約21km、面積308km<sup>2</sup>を測る。

地形的には実に変化に富んでいる。町の北西部には常願寺川と白岩川とによって形成された三角洲（デルタ）地帯があり、その南には常願寺川の扇状地が広がっている。富山湾岸までの



第1図 立山町の気候・植物帯の垂直変化（『立山町史』から）



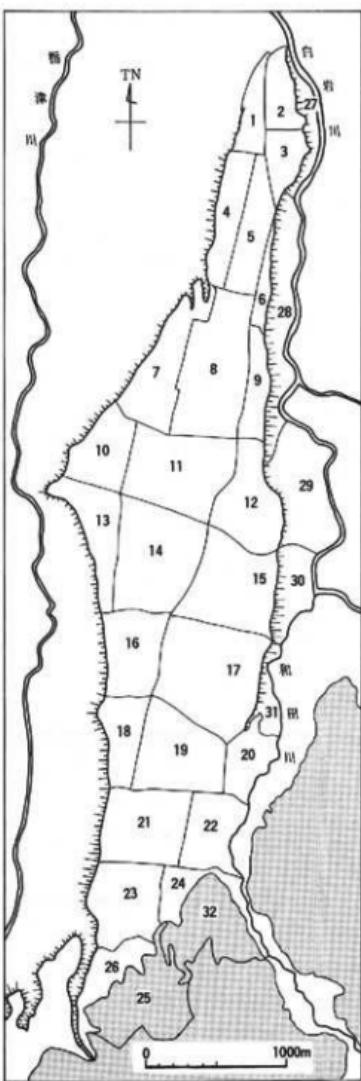
第2図 立山町西部の地勢 (縮尺1/100000)

距離は約10kmを測る。この扇状地の東側には隆起によってできた河岸段丘が南北に伸び、扇頂部の岩峰寺から上流の千寿ヶ原にかけても常願寺川沿いに河岸段丘が広がる(第1図)。この河岸段丘の後背地には丘陵があり、さらに標高3000mの山脈へと続く。これが立山連峰で、ここには氷河地形の圓谷(カール)や、火山地形である熔岩台地やカルデラが見られる。立山連峰の東側は黒部川によって深くえぐられ、後立山連峰によって長野県に接する。

このように立山町は東西の比高差が大きいため、町域には照葉樹林帯、落葉樹林帯、針葉樹林帯、低木林帯という多様な植物帯が成育し、それに伴なう複雑な動物相も存在する(第1図)。



第3図 調査地区図 (縮尺約1/40000)



第4図 調査地区の地区割 (縮尺1/40000)

#### 4 調査区の地勢と地区割

今回の調査区は、“上段段丘”と呼ばれる河岸段丘上の地域である。

この“上段段丘”は、旧の常願寺川扇状地が隆起してできた地形で、南北約6.5km、東西1～3kmの細長い卓状を呈している。標高は台地基部で約200m、先端で約52mである。段丘両縁には小支谷により開析された舌状の小丘陵が多くあり、また段丘の両側には東に白岩川、西に柄津川という中規模の河川が流れている。

このような地形は、古くより人々に絶好の居住環境を提供したらしく、当地区は県下でも有数の過疎密集地として知られている。

当段丘は、現在ほとんどが水田と集落になっているが、一部に森林のなごりを、とどめている(第3図)。この調査区全体をI区とし、これを地形の段差、水路、道路等によって32区に大別し、水田の境界等によってさらに小さな地区に細別して分布調査を実施した(第4図)。

(森秀典)

## 第2章 分布調査の成果

1985年度の調査によって整理箱30箱分の資料を採集した。これらは總破片数4095片、口縁部101.2個体分の土器類と若干の石器であり、まず遺跡ごとに説明して後に、上段段丘における散布状態を示すことにしよう。なお個体数に関しては、小破片が多いため、個体識別法ではなく口縁部計測法によった。口縁部計測法は、口縁部残存率（残存する口縁周の長さ／復原した口縁周の長さ）を合計した数値である。なお試行の結果、法量を含めて問題とする場合は1/6ないし1/4以上の破片に限り、上器量のみを問題にする場合には可能な限り小破片の数値まで含める方がよいことが判明している。ここで示す数値は後者のものである。（宇野隆夫）

### 1 遺跡と採集遺物

当段丘においては、従来知られていた遺跡に、今回の調査で判明した遺跡を加えて、30カ所の遺跡が所在する。この中にはすでに消滅した遺跡も含まれているが、個々に簡単な説明を加え、それぞれに関係する資料を示すことにしよう。

#### (1) 日中源兵衛藤遺跡（図版14の1、文献7・9）立山町日中字源兵衛藤

遺跡は、上段段丘最北端に開拓された小支谷の左岸、舌状小丘陵上に位置する。標高は52mを測る。

昭和49年、スーパー農道の工事中に発見された。今回の調査では数点の縄文土器片を採集したのみだが、昭和53年に圃場整備に伴ない発掘調査が行なわれており、それによると遺構では古墳時代の住居跡と思われる張り床2カ所と土坑1カ所が、遺物では縄文時代早期末～中期前葉の土器と土師器が検出されている。

現在は遺跡の中央をスーパー農道が走っているが、両側の水田下にはなお遺跡が良好な状態で保存されているものと考えられる。

#### (2) 日中墓ノ段北遺跡（図版14の2、文献7）立山町日中字墓ノ段・玉橋・魚梁場

遺跡は、上段段丘北端より約200m南、段丘東縁の白岩川に臨む崖上に位置する。標高は約50mを測る。

ここで言う墓ノ段北遺跡は、従来、墓ノ段北と呼んでいた遺跡とは異なり、日中魚梁場遺跡と呼ばれていた地点を含んで新しく名付けたものである。

今回の調査では、縄文土器片を多数採集したが、いずれも小片であり、図示できるものは2片のみであった。土器には口縁部の破片(22)、RLの縄文を横走させたもの(23)等がある（図版2の22・23）。

にちゅうはかのだんみなみ  
(3) 日中墓ノ段南遺跡 (図版14の3、文献7・9・14) 立山町日中字墓ノ段

遺跡は、前述した墓ノ段北遺跡から約200m南の段丘東縁に位置する。上段段丘はこの地点で少し東側にふくらみ、やや広めの平地を形成している。

ここでいう墓ノ段南遺跡は、従来墓ノ段北・墓ノ段南と呼ばれていた地点を一括して、新しく名付けたものである。

当地は、古くから遺物が多く出土する地点として知られており、1972年と1978年の2度にわたりて発掘調査が行なわれている。それによると、1972年の調査では、縄文時代中期後葉を主体とした土器が検出されており、1978年の調査では、縄文時代中期中葉の住居跡3棟と同時期を主体とした多数の土器が検出されている。また、1972年の調査では古墳時代以降の土器も確認されており、この一帯は複合遺跡ではないかと考えられている。

今回の調査では、10数片の縄文土器を採集し、そのうちの3片を図示した(図版2の2~4)。いずれも口縁部の破片であり、3は波状口縁を呈するものと思われる。2~4いずれにも口縁に沿って沈線をめぐらしており、2ではRLの縄文を縦方向に回転させている。

なお、図版2の5・6は分布調査以前の採集品であり、7~21は1972年の調査の出土品のうち未紹介のものである。

5は浅鉢の口縁部で口縁端部に沈線が一本めぐらしている。

6は縦方向に回転させたLRの縄文があり、口縁部に半隆起線を1条めぐらし、その上部に刻みを持っている。

7は波状口縁の基部に隆帶を貼り付けて2重にしてある。

8は口縁部の破片で、二本の隆帶の間に幅広の沈線をひき、そこに連続刺突文を施している。内面にも隆帶をめぐらせている。

9は隆帶による文様を施している。

10は縦に2条の隆帶を施し、その隆帶上に縄文原体を押圧している。

11は口縁部の破片で、二本の平行する隆帶を施している。

12は貝殻腹縁による条痕を縦方向に施している。

13は縦に微隆起線文を施している。

14は土器の底部であり、縦に2本隆帶を施している。

15は横方向に隆帶をめぐらし、隆帶上には縄文による施文をしている。隆帶下には連続刺突文を施しており、隆帶から下へ半隆起線文が派生している。

16はRLの縄文の上に2本の沈線を垂直に施している。

17は葉脈状文を施しており、中期後葉の串出新式と思われる。

18・19は横方向に回転させたRLの縄文を施している。

20は土器の底部で、縦方向に回転させたRLの縄文を施している。

21は磨製石斧で石材は蛇紋岩を使用している。幅は2.4cm、残存長は5.1cmである。

(4)・(5) 野沢大谷（北・南）遺跡（図版14の4・5、文献7）立山町野沢字大谷

遺跡は、野沢集落東方の上段段丘西縁、小支谷によって開析された舌状小丘陵上に位置し、標高85～90mを測る。『立山町史』等によると、遺跡は神明社を境に南北に分けられているが、野沢と日中上野を結ぶ道路以南は総合運動公園建設により破壊されたため、ここでは道路を境に南北に分けることとする。

当遺跡の南には、北から野沢孤幅・野沢苦情地・野沢龍ヶ鼻・末上野龍ヶ浜という順に遺跡が連なり、上段段丘上における縄文遺跡の中核の一つとなっている。これは、このあたりの段丘西縁部に、小支谷によって開析された舌状丘陵が多いという、地形的要因によるものと考えられる。

1982年に総合運動公園建設に伴ない、南遺跡の部分について調査が実施され、縄文時代中・晚期の土器と石器が若干出土している。

今回の調査では、北遺跡からは縄文土器200片余と石鏃が、南遺跡からは縄文土器9片を採集した。図示したもののうち、30・31が南遺跡で採集したもので、32～47が北遺跡で採集したものである（図版2の30～47）。

30はLRの縄文原体を横方向に、31はRLの縄文原体を縱方向に回転させた縄文を施す。

32～35は口縁部である。

32は口唇部を肥厚させる。外面には横方向に3条の半隆起線を施している。

33は縄文の上に3条の半截竹管による平行沈線を施している。

34は口縁の内側が肥厚し、無文である。

35は口縁を内面に折り返して肥厚させ、縄文を押圧する。

36は半隆起線で区画した内側に正位格子目文を施している。縄文時代中期前葉の新崎式と思われる。

37・38も格子目文を施しており、新崎式と思われる。

40・41は半隆起線文を施している。

42・43は貝殻腹縁による条痕を施している。43は口縁部破片である。

44はRLの縄文を横方向に回転させ、45はLRの縄文を横方向に回転させて施している。

46は、深鉢の底部であり、底面に網代痕を有し、外面には箒削りを施している。

47は有茎石鏃であり、石材は石英斑岩（漂飛流紋岩）である。先端がわずかに欠けている。

(6) 野沢孤幅遺跡（図版14の6、文献7・12・13・20）立山町野沢字孤幅

遺跡は、上段段丘西縁の小支谷によって開析されてできた小丘陵上に、東側の谷に沿って立地している。標高は95～100m、面積は約30000m<sup>2</sup>を測る。

総合運動公園建設に伴ない、1982年から3カ年にわたって発掘調査が行なわれた。その結果縄文時代中期中葉の住居跡6棟が検出され、同時期を中心に早～晚期にかけての土器・石器が出土した。

現在は、総合運動公園建設のため削平されてしまつており、今回の調査では僅かな土器片を採集したにすぎなかつた。

(7) 野沢字苦情地遺跡（図版14の7、文献7）立山町野沢字苦情地

遺跡は、県道五百石往来線の両側、小支谷によって開析された舌状丘陵上に位置する。標高は約100mを測る。

昭和45年に養鶏団地が造成され、遺跡の北半分が削平されたが、その際、安田良栄氏により縄文時代中期前葉の土器、打製石斧、磨製石斧、剝片石器、石槍、石錐等が採集されている。

養鶏団地の南側水田下には、まだ包含層が残っていると思われるが、今回の調査では何も採集できなかつた。

(8) 野沢龍ヶ鼻遺跡（図版14の8、文献7）立山町野沢字龍ヶ鼻

遺跡は、上段段丘西縁に形成された舌状丘陵のうち、最も南の小丘陵に立地し、スーパー農道北側に位置する。

過去に、半截竹管文や刻みのある隆帯を施した土器片が採集されており、縄文時代中期中葉を主体とする遺跡と推定される。

現在は、旧地表の上に盛土しているため、遺物は少なく、遺跡の広がりもつかみにくく。

今回の調査では、縄文土器79片を採集し、そのうち5片を図示した（図版2の24～28）。

24は、中期前葉の土器片と考えられる。口縁部に半截竹管による爪形文を、その下には2条の水平の半隆起線を、その下には連続刺突文を施している。

25・26は、半隆起線文によって文様を施している。

27・28は、RLの縄文を施している。27は口縁部である。

(9) 末上野龍ヶ浜遺跡（図版14の9、文献7・9・20）立山町末上野字龍ヶ浜

遺跡は、スーパー農道の南、上段段丘が最も西に突出した部分の、段丘崖上の平坦地に位置する。遺跡中心部の標高は約115mを測る。

過去に、安田良栄氏によって、縄文時代前・中期の土器、磨製石斧、石錐、敲石等が採集されている。

また、1984年に老人ホーム建設に伴ない発掘調査が行なわれた。縄文時代の土坑10カ所と溝1カ所が検出され、縄文土器10片余が出土している。

残念ながら、今回の調査では何も採集できなかつた。

(10) 日中上野東林遺跡（図版14の10、文献7）立山町日中上野字東林

遺跡は、上段段丘の東縁中央部、日中上野小学校の南南東約400mの所に位置している。

過去に、縄文土器片が採集されているが、圃場整備のため地形的にもかなり変化してしまつており、今回の調査では遺物は採集できなかつた。

遺跡の年代・性格などの詳細は、資料不足のため不明である。

**⑪ 白岩横骨遺跡** (図版14の11、文献7) 立山町下白岩字根骨

遺跡は、上段段丘の東縁、上東中学校の南に位置する。

以前から、縄文時代前期初頭に属する土器が採集されていたが、昭和51年に、圃場整備に伴ない発掘調査が行なわれた。その結果、人骨や縄文土器片、石鎌を伴なった墓壙とみられる縄文時代晚期の遺構をはじめ、数カ所で遺構の存在が確認された。

現在、圃場整備により地形がかなり変化してしまっており、今回の調査では遺物は採集できなかった。

**⑫ 白岩古高遺跡** (図版14の12、文献7・18・19) 立山町白岩字古高

遺跡は、上段段丘の東縁、石坂集落の北方、小支谷によって開析された舌状丘陵の先端部に位置する。

北陸自動車道建設に伴なう採土予定地となり、1977年度と1979年度の2回にわたり発掘調査が行なわれた。その結果、縄文時代中期後葉の串田新Ⅱ式期に比定される住居跡1棟が検出され、同時期の土器、打製石斧等が出土している。

なお、遺跡は土取りにより削平され消滅した。

**⑬ 石坂助地沢・助地沢Ⅱ遺跡** (図版14の13、文献7・18・19) 立山町石坂字助地沢

遺跡は、石坂助地沢遺跡と石坂助地沢Ⅱ遺跡との2地点に別かれている。前述の白岩古高遺跡と同じ舌状丘陵上にあり、白岩古高遺跡から南西約50mの所に石坂助地沢Ⅱ遺跡が、さらに南西50mの所に石坂助地沢遺跡が位置している。

石坂助地沢遺跡は、以前から縄文土器や剝片石器が採集されて、知られていたが、北陸自動車道建設に伴なう採土予定地となつたため、1979年に発掘調査が行なわれた。その結果、新たに須恵器、土師器、剝片が各一片出土し、遺跡は縄文時代及び古墳時代に属するものと考えられる。

石坂助地沢Ⅱ遺跡は、1977年に北陸自動車道建設に伴なう採土予定地の予備調査で発見された。1979年に発掘調査が行なわれ、磨製石斧と擦石が各1点出土している。遺跡の年代は縄文時代に属するものと考えられる。

両遺跡とも、土取りにより消滅した。

**⑭ 白岩蔽ノ上遺跡** (図版14の14、文献7・10・11) 立山町白岩字蔽ノ上

遺跡は、上段段丘東縁の、東西約100m、南北約1kmと南北に細長い舌状丘陵の先端に位置する。標高は134mを測る。東を和田川、西を尾掛川が北流している。

当遺跡は古くから縄文土器や石器の採集によって知られていたが、1979年に当遺跡一帯で土砂採掘事業が計画され、それに伴ない同年から1981年にかけて、計3回の発掘調査が行なわれた。その結果、縄文時代中期初頭の住居跡7棟、土坑35個、時期不明の炭焼窯と思われる土坑4個、集石を伴なう土坑1個が検出された。また遺物としては、先土器時代の局部磨製石斧、錐状石器等の石器と、縄文時代中期初頭の土器や石鎌等の石器が出土している。

現在、当地は採土場となっているが、今回の調査でも、周辺から少量の縄文土器片を採集できた。

(15) 白岩尾掛遺跡 (図版14の15、文献7・24) 立山町白岩字尾掛

遺跡は、上段段丘の東縁、前述の白岩戸ノ上遺跡と同じ舌状丘陵の基部に立地する。白岩戸ノ上遺跡から南約100mの位置にあたる。標高は約140mを測る。当遺跡は、縄文時代草創期の遺物、押圧土器や有舌尖頭器の採集された遺跡として以前から有名であり、他にも、縄文時代早・前・後期の土器、珠状耳飾、石鏃等が採集されている。

今回の調査では、縄文土器を10数片採集したにとどまったが、草創期から後期まで、年代幅も広いことなどから、きわめて重要な遺跡といえる。

(16) 上末遺跡 (図版14の16、文献なし) 立山町上末

遺跡は、上段段丘の基部西縁、県道米道・上瀬戸線から南へ約300mの所に位置する。

当遺跡は、今回の調査で新たに発見・命名した遺跡である。現状は大部分が畠地で、一部水田となっている。

調査では、縄文土器10数片を採集したが、いずれも小片であったため、吉野香岳氏から以前に表採された遺物を借りうけ、ここに紹介した(図版2の1)。

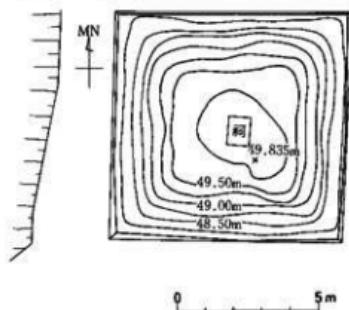
1は縄文時代中期中葉の天神山式と思われ、口縁部に2条の隆帯をめぐらし、その間に、2条の半截竹管による半隆起線文を施す。2条の隆帯のうち口縁部の隆帯上には、半截竹管による爪形文を、2段目には緩杉状刻目文を施しており、胸部へと続く隆帯が派生している。隆帯下の胴部には半截竹管による半隆起線文をめぐらせ、半隆起線上には浅い爪形文を施している。

(森秀典・岩瀬彰利)

(17) 藤塚古墳 (図版14の17、第5図、文献7) 立山町日中字魚梁場

台地北端部に位置する直径約20m、高さ3.8mの円墳。現在の墳丘は裾部の石垣の影響を受けて方墳状になっている。1964年に立山町教育委員会が発掘調査を実施した。東を北流する白岩川の川原石を利用して作ったとみられる東西2.40m、南北1.40mの竪穴式石室をもち、床面には偏平な自然石を敷く。床面の中央部から朱が出土している。遺物は直徑9.6cmの仿製方格規矩鏡1面、鉄劍1個、鉄槍2個がある。鏡の付近からは木片が2点出土しているが、鏡の箱か木棺片であるかは分らない。古墳時代中期。

(宇野隆夫)



第5図 藤塚古墳の現状 (縮尺1/200)

(18) 上末古窯跡群（図版14の18~22、文献7・9・23）立山町上末

調査区南端の台地基部から法光寺谷と釜谷と呼ばれる2つの谷が南にのびる。その山裾部の斜面に奈良時代後半から平安時代初めにかけて7基以上の須恵器窯が営まれた。この2つの谷の窯跡群をそれぞれ法光寺谷支群・釜谷支群と呼ぶ。

法光寺谷支群は東の尾根に法光寺谷1号窯（大正割窯）、谷を隔てて西の尾根の北側斜面に2号窯、その間の谷部西側斜面に3号窯、更に谷部の奥に4号窯の存在することが確認されている。また釜谷支群は法光寺谷2号窯と谷を隔てた西の尾根の北側山裾に2基、西側山裾に1基が確認されている。

窯跡の現状については、法光寺谷1号窯は既に現代の瓦焼成用粘土の採掘によって全壊している。1978年に立山町の圃場整備に伴なう予備調査において1号窯・2号窯の遺物を表面採集し、1号窯南側の水田部分約2400m<sup>2</sup>の地区に試掘区を設けて灰原の確認調査を行なった。2号窯についても南側畠地の灰原の確認を行ない、遺物が数点出土した。

また釜谷支群は、1917年に既に確認されており、1基は耕地整理により全壊したが、1929年県史蹟に指定された。その後1938年に大村正之氏によって報告がなされた。1974年に至り、藤田富士夫氏により法光寺谷支群をも含め採集資料の詳細な報告がなされると同時に、遺跡の保存が訴えられた。1978年の予備調査では北側から西側山裾部に試掘区を設け、北側山裾部で1号窯、2号窯の灰原を検出した。窯の本体は尾根の西側端部に構築されたと推定できる。

須恵器散布地1：法光寺谷支群1号窯灰原を中心とする地区（図版14の20）。ここで採集した須恵器は主として灰原の資料であり、窯本体の資料も含まれている可能性がある（図版3の1~24）。絶破片数1974片・口縁部40.4個体分に及ぶ。器種構成は杯B蓋が312片・14.8個体分。杯B身が258片・4.9個体分。杯Aが159片・0.9個体分。杯B身または杯Aどちらか不明なものが502片・10.9個体分。壺類が398片・2.8個体分。甕が233片・0.3個体分。器種の不明なものが112片・0.1個体分である。

1~8は杯B蓋。頂部切り離し・調整手法等によっていくつかの種類に分類できる。まず頂部外面に回転鋸削りを行ない、つまみの下端が比較的くっきりとしたくびれをもつものには大型のもの（1、口径20cm）と小型のもの（3・4、口径11~12cm）とがある。器壁は薄く、口縁部の作りも丁寧である。次は頂部外面に回転糸切り痕を残し、部分的に回転鋸削りを施すものである。大型のもの（2、口径18cm）と、小型でつまみがボタン状に退化したもの（5、口径13cm）とがある。次に頂部外面を回転糸切りの後、調整せず、つまみもボタン状に近いもの（6）同じく回転糸切りの後、未調整でつまみのないもの（7・8）がある。これらは小型品が多く、器壁が厚く、口縁部の作りも粗雑である。以上の各類はおそらくは記述した順に型式変化し、年代は8世紀後半から9世紀末ないし10世紀初めに及ぶと推測できる。

9~19・24は杯B身。身の深い器壁の薄いもの（9、口径15cm）と、器高が低く高台が体部と底部の境より内側に付くもの（11~19、口径10~12cm）、やや深く椀に近いもの（24）がある。

20~23・25は杯A。底部を回転窓切りによって切り離すもの（20~23）と、回転糸切りによるもの（25）とがある。また大型で環状のつまみが付く盤の蓋（26、口径30cm）がある。

27・28・30・31は壺類。全体の形態を復原できない破片が多い。31は双耳壺の耳の部分である。壺類としては長頸壺、短頸壺、小壺、横瓶等がある。

29・32は甌。口縁部に沈線も波状文も施さないもの（29）と、1条の突帯の下に1帯の粗雑な波状文を施すもの（32）がある。

以上の須恵器の年代幅は100年を超えるであろうことから、須恵器散布地1を形成した窯は1基以上存在した可能性が高いと考える。

**大正割地区**：法光寺谷1号窯灰原の発掘資料である（図版14の20）。総破片数141片・口縁部5.7個体分を数える（図版4の1~21）。器種構成は杯B蓋が3片・0.3個体分。杯B身が23片・1.7個体分。杯Aが32片・3.3個体分。壺類が55片・0.4個体分、甌は28片である。

1は杯B蓋。つまみを付していたと思われ、頂部外面に回転窓削りを施している。

2~7は杯B身。体部に丸みを持ち、体部と底部の境が不明瞭なもの（2、口径16cm）、明瞭な稜をなすもの（3・4、口径14~15cm）があり、これらより器高が低く、高台のしっかりしたもの（6・7、口径11cm）、高台の退化したもの（5、口径12cm）がある。

8・9は皿。高台の付くもの（8）と、高台の付かないもの（9）とがある。

10~21は杯A。口径6cm前後のものが多い。底部に回転窓切り痕を残すもの（10~13・16・19）と回転糸切り痕を残すもの（14・15・20）とがある。また体部が開き気味にたち上がる皿状のもの（20・21）もある。

22~24は壺類。双耳壺がある。

**須恵器散布地2**：法光寺谷支群2号窯灰原を中心とする地区（図版14の21）。ここで採集した資料は総破片数68片・口縁部1.5個体分であった。器種構成は、杯B蓋が14片・0.3個体分。杯B身が9片・0.5個体分。杯Aが1片・0.1個体分。杯Bまたは杯Aどちらか不明なものが7片・0.6個体分、壺類が21片、甌が16片である。ここでは遺物の遺存状態が悪く、特徴を知り得るのは、若干数の杯B蓋のつまみの部分と頂部のみであった。つまみは最大幅の位置が基部から2/3上にくる稜の鋭いしっかりしたつくりのもの（径2.8cm）と、頂部の突起は残るがボタン状に退化しつつあるもの（径2cm）とがある。杯B蓋の頂部はすべて回転窓削りを施している。なお部分的な回転窓削りを施し、回転糸切り痕を残すものがある。

**伝法光寺谷4号窯**：ここでの資料は、吉野香岳氏より借用したもの（図版14の18）、総破片数22片・口縁部3.1個体分を数える（図版4の25~41）。器種構成は、杯B蓋が7片・2.1個体分。杯B身が9片・0.6個体分。壺類が5片・0.4個体分。器種の不明なものが1片である。

25~31は杯B蓋。頂部に回転窓削りを施すものと、回転糸切りした後に部分的に回転窓削りを施すものとがある。つまみの形態については頂部が突出し、下縁のくびれの明瞭なもの（25・26）、頂部の突起がなくなり丸く仕上げるもの（27）、下部のくびれがなくなりボタン状に近くなる

が、なお頂部にわずかに盛り上がりを残すもの（28）、低いボタン状になるもの（31）がある。33～36は杯B身。体部と底部の境で明瞭な稜をなし、そこから内側に高台が付くもの（33～35）がある。また重ね焼きで接着したもの（36）があって、少なくとも4枚以上重ねたと考える。

37は皿B。土師質で、底部に回転糸切り痕を残す。

38は杯A。大型品（口径不明）で、底部は回転糸切りの後、未調整である。

39～41は壺類。長頸壺の頸部（39）、短頸壺（40）、双耳壺の肩部（41）がある。

以上の資料の年代は須恵器散布地1の資料にほぼ併行すると考えうる。

須恵器散布地3：釜谷支群灰原を中心とする地区（図版14の22）。ここで採集した資料は、総破片数22片・口縁部0.7個体分を数える（図版5の1～6）。器種構成は、杯B蓋が5片・0.3個体分。杯B身が5片・0.2個体分。杯Aが3片。杯B身または杯Aどちらか不明なものが1片・0.2個体分。壺類は5片、甕は3片である。

1・2は杯B蓋。頂部につまみの痕跡のある大型品で頂部に回転範削りを施したもの（1、口径18.6cm）と、これもつまみの痕跡を残した小型品で頂部を回転糸切りした後、周辺部に回転範削りを施すもの（2、口径10.5cm）とがある。

4は杯B身。高台が著しく退化し、底部は回転糸切り痕を残す粗雑なものである。よって高台が消滅する直前の資料と考えうる。

3は杯A。小型（口径11cm）で、底部には回転範切り痕を残す。

5・6は壺類。全体の形態は不明である。

なお、8は出土地不明の杯B身で大型品（口径14cm）である。

以上の資料の年代は、既に酒井重洋・岸本雅敏氏が指摘した通り、法光寺谷支群にほぼ併行すると考えうる。

（大竹豊）

輪轆回転方向について：上末古窯跡群及びその周辺一帯の散布地から採集した須恵器の輪轆回転方向について観察した結果を以下に示す。方法はこの地区で採集した須恵器の全破片の中から、杯B蓋・杯B身・杯A身の3種を抽出し、杯B蓋については頂部外面の回転範削り痕（以下範削りと略す）及び回転糸切り痕（以下糸切りと略す）によって、杯B身・杯A身については底部の回転範切り痕（以下範切りと略す）及び糸切りによって輪轆の回転方向を判断した。抽出した総破片数は841片、うち輪轆回転方向が確認できたものは298片であり、確認率は平均して35.4%であった。

須恵器散布地1では総破片数729片、確認できたもの259片である。杯B蓋では範削り右回転（時計廻り）81、同左回転（反時計廻り）54、糸切り右回転15、同左回転15。この中には範削り糸切りの両方が観察されるものが20片含まれる。杯B身では、範切り右回転15、同左回転22、糸切りの方は左右且回転とも確認できなかった。杯A身では、範切り右回転30、同左回転29であり、糸切り右回転3、同左回転15であった。

大正割地区では、総破片数59片、確認できたもの14片である。杯B蓋は確認できなかった。杯B身では、窓切り右回転1、同左回転2。糸切りの方は左右両回転とも確認できなかった。杯A身では、窓切り右回転8、同左回転2。糸切り右回転は確認できず、同左回転は1であった。須恵器散布地2では総破片数24片、確認できたもの10片である。杯B蓋では、窓削り右回転3、同左回転6、糸切りの方は左右両回転とも確認できなかった。杯B身は窓切り右回転が1片だけ確認でき、杯A身は確認できなかった。

伝法光寺谷4号窯跡出土品では総破片数16片、確認できたもの11片である。杯B蓋では窓削り右回転6、同左回転1、糸切りの方は右回転1片だけであった。この中には窓削り、糸切りの両方が確認できるものが1片含まれる。杯B身では窓切り右回転3、同左回転1で、糸切りの回転方向は確認できなかった。杯A身は確認できなかった。

須恵器散布地3では総破片数13片、確認できたもの4片である。杯B蓋では窓削り右回転2、同左回転1、糸切りの方は左右両回転とも確認できなかった。杯B身は糸切り左回転が1片確認できただけであり、杯A身は確認できなかった。

以上の数値から得られたことを若干述べてみよう。但し須恵器散布地1以外の数値は、回転方向を確認できた破片数が少ないので、ここでは須恵器散布地1の数値を用いることにする。更に、同地区も窯跡を含むとはいって、散布地であるため、ある程度の傾向をつかむことに止めたい。

まず須恵器散布地1の全体の比率は右回転と左回転とが、ほぼ1:1であった。個別にみると杯B蓋では右回転、杯B身・杯A身では左回転が3:2の割合が多い。杯B蓋では窓削りと糸切りの両方が観察されるものが20片あることを先にも述べたが、これをみると、両者の回転方向は必ずしも同一方向とは限らなかった。例えば、糸切りが右回転でも窓削りが左回転だったり、その逆だったりするものがあった。つまり、切り離し時と調整時の轆轤の回転方向が同一ではないものもあった。杯A身の窓切りでは、左右の比率はほぼ1:1であり、杯B身の方ももう少し資料が増えれば、同一比率になる可能性がある。杯A身の糸切りの方は、右回転と左回転の比率が1:5で、左回転の方がかなり高い割合を占める。最後に、杯B蓋は窓削りと糸切りを、杯A身については窓切りと糸切りの左右それぞれの比率を考え、それから回転方向の年代変化を考えたい。まず杯B蓋では、窓削りの方は右回転:左回転は5:3、糸切りの方は1:1。杯A身では、窓切りの方が1:1、糸切りの方は1:5である。須恵器の切り離し調整技法としては窓切りや窓削りより糸切りの方が新しい要素であろう。この数値から一概には言えないが、杯B蓋では、右回転優勢から同一比率に、また杯A身では、同一比率から左回転優勢へと変化した。つまり、左回転が両者とも時代が下るに従って多くなることになる。

(吉田正人)

にっちゅうちょくし  
日中勅使塚 (図版14の23、文献8・25) 立山町日中字堂浦  
遺跡は、日中日置神社の境内、社殿の東側に所在した。

地元の人によると「勅使塚」と呼ばれていたというが、『立山の文化』第2号によれば「巫子塚」となっている。現在はすでに削平されているが、削平時に一字一石経などが出土したと伝える。しかし、出土品が現存しないため、詳細は不明である。

28 日中土塁 (図版14の24、文献9) 立山町日中字墓の段

上段段丘北端近くの段丘東縁、高さ約17mの崖上に所在し、白岩川をはさんで上市町の弓庄城に対峙する形で築かれている。

日中土塁は、佐々成政が天正11年（1583年）に弓庄城を攻めた時に築いた付城の一つであり昭和53年に圃場整備事業に関連して、富山県教育委員会が試掘調査を行なった。

構造は単郭・単濠から成り、規模は濠の外側で南北約55m、東西約60mである。平面形は方形を呈する。土塁・濠は南・北・西の三方に廻らしているが、東側は急峻な崖であることからもとから土塁・濠は存在しなかったと推定される。西側やや南寄りに出入口が設けられ、濠には土橋がかけられている。遺構の遺存状況はきわめて良好である。

（森秀典）

29 日中経塚 (図版14の25、文献7・8) 立山町日中字経塚、立山町指定文化財

旧立山参道をはさみ、西北に日中東経塚、東南に日中玉橋経塚がある。日中玉橋経塚からは銅製円筒形経筒が出土している。経筒の銘文には、且那が田部氏女、本願は越中国新川郡に住む賢海であること、二親成仏のために法華經典の一巻を納めたことを記し、大永5年（1525年）5月吉日の年号をもつ。付近にさらにいくつかの経塚が所在したと伝えるが現存しない。

（宇野隆夫）

30 訓道堂經塚遺跡 (図版14の26、文献8) 立山町小林字駅迎堂

遺跡は、立山町小林地内の上段段丘西側崖上、県道道源寺・上市線の両側に位置する。道路北側に3基がほぼ完形で残り、南側には残欠1基がある。

経塚に関する記録・伝承はなく、昭和60年5月に行なわれた試掘調査でも、越中瀬戸数片が出土したのみであり、遺跡の性格等の詳細は不明である。

（森秀典）

31 越中瀬戸古窯跡群 (図版14の27~30、文献5・6・9) 立山町下瀬戸・芦見・中林

伝小次郎窯：上段段丘の段丘最南部、標高200m前後の舌状丘陵裾に位置する。本窯は単房の大窯であると考えられるが、実測図は残されていない。遺物は、窯が破壊される際に、吉野香岳氏により採集されたものと今回の調査のものとがあり、21片・口縁部6.0個体分である。

吉野氏採集品には、椀、皿、香炉、徳利（図版6の1~6）がある。椀は、鉄軸を施し、口縁が開いている。皿は、灰軸を施し、内面には環状に棱がめぐらし、その中心に印花文をもつ。また灰軸皿が5枚と匣鉢が接着したものもある。香炉は、三足で底部に糸切りの痕跡を残す。台付灯明皿は、鉄軸（茶）をかけたものであり、皿部は口縁が大きく開き折れ曲がっている。

今回の採集遺物では、皿、椀、焼台があった。皿（図版8の18）は折口で内面に印花文をもつ。これらの遺物は、灰軸を施したものが多く、硬質で良質の粘土を使用している。

小次郎は、前田安勝により尾張から招かれた陶工で、この地で特別の庇護をうけ、天正18年



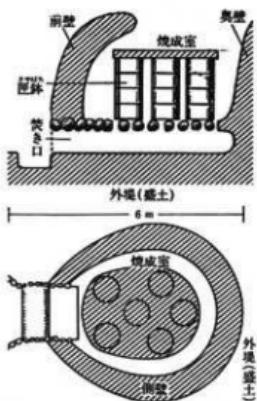
第6図 越中瀬戸窯の分布（『越中の焼きもの』から）

(1590年)に開窯した越中瀬戸の創始者とされている。開窯当時には、既にこの上末地方には古瀬戸を模した焼きものが存在したとされ、これらの窯と本窯との関係が注目される。

新瀬戸古窯：白岩川西側に形成された上段段丘の西側斜面に位置し、標高140~150mである(18-1図)。

今回の採集遺物は26片・2.0個体分があった。器種構成は、鉄釉碗が1片・口縁部なし、灰釉皿1片、鉄釉皿6片・0.2個体分、無釉皿1片、鉄釉壺1片、すり鉢8片・0.2個体分、匣鉢7片・0.6個体分、焼台1片・1個体分である。図示できたものには、皿、碗、すり鉢、焼台、匣鉢(図版8の7~16)がある。皿は、削り出し高台を持つ。すり鉢は、口縁端部が厚い形態を示すもので、オロシ目は中心部で円状になる。底部外面に回転糸切りを残し、鉄砂釉をかける(9~11)。12は焼き台で、断面が台形を示すものである。13~16は匣鉢である。14は内面に径5.6cmの高台痕があり、粘土紐が付着している。これらは、ほとんどが鉄釉のものであり、灰釉のものは少ない。採集品は「越中瀬戸焼窯跡分布図」(第6図)によれば、九左衛門窯もしくは伊兵衛窯にあたると考えられる。これらの窯はいずれも初期の窯であり、窯構造は登窯である可能性がある。

九左衛門窯は、1976年に立山町教育委員会により発掘調査が行なわれている。出土遺物は、



第7図 基兵衛窯(胴窯)の構造  
(『越中の焼きもの』から)

に分けることは困難である。以下、窯跡と遺物の関係を比較的結びつけやすいものについて述べていくことにする。

基兵衛窯の製品と推定できるものは、楕、皿、すり鉢、片口鉢、おろし板、甕、匣鉢（図版6の17～19、図版7、図版8の1）がある。図版6の17は、鉄釉（黒）の楕であり口縁がほぼ直立する形をとるものである。18は鉄釉（茶）の皿で、削り出し高台をもつ。すり鉢は3点あり（図版6の19、図版7の1・2）、いずれも口縁端部があり肥厚せず、オロシ目を中心まで直線的に引くものである。鉄釉（茶）を施す。図版6の19は、内面に直径10.8cmの高台の重ね焼きの痕跡がある。また図版7の1は、片口状の口縁を示す。3は灰釉の片口鉢で、内面には径約10cmの図版8の2のような形態の焼き台の付着した痕跡が認められた。4は鉄釉（茶）のおろし板である。5～7は鉄釉の甕で、口縁部をつまみ出すもの（5）と折り曲げるもの（6・7）がある。また5・7には白釉もかかる。6には内面底部に、径10cmの重ね焼の痕跡があった。図版8の1は匣鉢で、他の地域で採集したものより大型（口径31.8cm）のもので複数の製品を焼成できると考えられる。これらの製品は、あまり良質の粘土を使用していない。

基兵衛窯は、現在も窯跡が残っており、立山町の町文化財となっている。その形態は、胴窯と呼ばれる越中瀬戸焼独特の窯で、場所をあまりとらない簡便なものである（第7図）。この胴窯は、登り窯の周囲にいくつか存在するという形で築かれたものらしい。そのため、村全体で窯業に携わり、長時間の生産活動が可能になったとされている。

甚四郎窯の製品と推定できるものは、図版8の4～17であり、楕、燭台、すり鉢、瓦がある。楕は灰釉のもので、直立する口縁をもつもの（4）と、黒釉で口縁の開く形のもの（5・6）と、鉄釉（茶）で口径が大きく口縁が垂直に立つものとがある。8・9は、灯火器である。8は高

小皿、茶碗、大皿、鉢、すり鉢、壺、陶錐、匣鉢、窯道具があり、江戸中期の年代が与えられている。

瀬戸古窯跡群：上段段丘東側にあり、中林部落から下瀬戸部落の広範囲にかけて越中瀬戸が散布している。標高は約160mを測る。今回の調査では756片・23.7個体分を採集し越中瀬戸の分布の中心地であることがわかる。器種構成は灰釉楕10片・口縁部0.3個体分、鉄釉楕58片・1.0個体分、灰釉皿2片・0.1個体分、鉄釉皿19片・5.0個体分、鉄釉壺26片・0.7個体分、鉄釉鉢24片・1.2個体分、水注1片・0.2個体分、灯明皿3片・2.2個体分、すり鉢16片・0.5個体分、管状陶錐5片・1.0個体分、土師器皿1片・0.4個体分、瓦11片、焼台2片・1.8個体分、匣鉢359片・9.3個体分、匣蓋8片・3.1個体分である。この地域は「越中瀬戸焼窯跡分布図」によれば、約20基の窯が密集する。そのため、遺物を窯ごとに

台のつかない灯明皿、9は釘状のローソク立てである。すり鉢は、やや肥厚する口縁端部をもち(12)、オロシ目が直線的であり、底部に糸切りを残すものである。瓦は三つ巴文をもつ軒樋瓦である。

孫市窯と関連する資料は、今回の調査では採集できなかったが、1978年に立山町教育委員会による発掘調査が行なわれている。それによると、窯の構造は連房式登窯で、窯室の一つが確認された。出土遺物としては、小皿、徳利、椀、片口椀、鉢、大皿、すり鉢、匣鉢、窯道具があり、鉄軸をかけたものが多い。なお同調査では繩文中期後葉の住居跡が検出されている。

以上のほかに、出土地が不明であるが重要な資料がある。図版5の14~16・19は、吉野香岳氏の所蔵品であり、鉄軸片口椀、鉄軸船徳利、灰軸双耳壺がある。鉄軸船徳利(16)は肩部に寛永10年(1633年)の刻銘をもつ。19は小型の単品(高台径約12cm)を入れる匣鉢である。図版5の13・17は中川氏の採集品であり、13は鉄軸椀、17は鉄軸すずり、18は鉄軸台付灯明皿である。18は形態に小次郎窯のものと異なる特徴をもち、時期差を考えうる。(岡本淳一郎)

## 2 遺物の散布状態

前節で遺跡とそれに關わるであろう遺物を紹介したが、このほかにもかなりの資料を採集している。ただし、これらが採集地点の下に遺跡が存在することを示すかどうかは判断の難しいところもある。また当地はすでに圃場整備の行なわれた水田地帯であるため、遺物を探集しえなかった地点には遺跡がないとも断言できない。本節では、当段丘全体における遺物の散布状態を示して、遺跡の様相を探る基礎資料としよう。

### (1) 繩文土器の散布状態(図版14、第8図)

今回の分布調査で報告した繩文土器片の総数は785片・口縁部1.3個体分であるが、この中には、1973年の立山町教育委員会による日中墓ノ段遺跡の発掘によって出土した繩文土器の一部(241片)が含まれている。なお本資料は細片が多く、器種の構成比率は呈示できないが、多くは深鉢であろう。

繩文土器の散布状態は、上段段丘の北端から北端部東縁にかけてと、中央北部西縁の舌状丘陵上に多く散布しており、中でも日中墓ノ段・野沢大谷・野沢龍ヶ鼻・白岩尾掛の各遺跡で多数の繩文土器片を採集した。

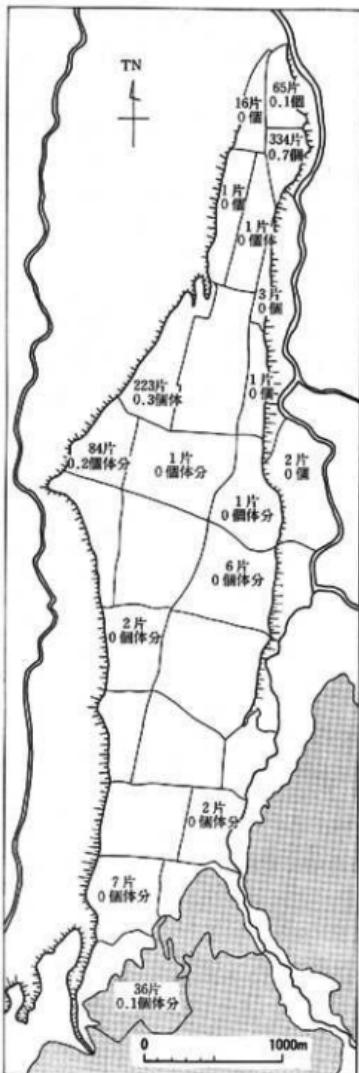
また、上段段丘の南端の西縁にも多数散布していた。

その他、段丘の中央の水田部分からも僅かながら繩文土器片を採集することができた。

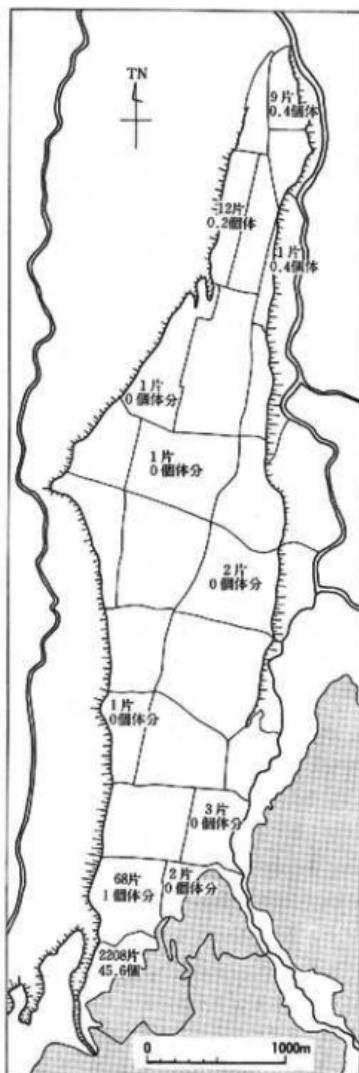
なお、現在は土取り等によって、多くの遺跡が消滅してしまったが、上段段丘中央部東縁も白岩戸ノ上遺跡を始めとする多数の繩文時代遺跡が集中していた地区である。(岩瀬彰利)

### (2) 須恵器の散布状態(図版14、第9図)

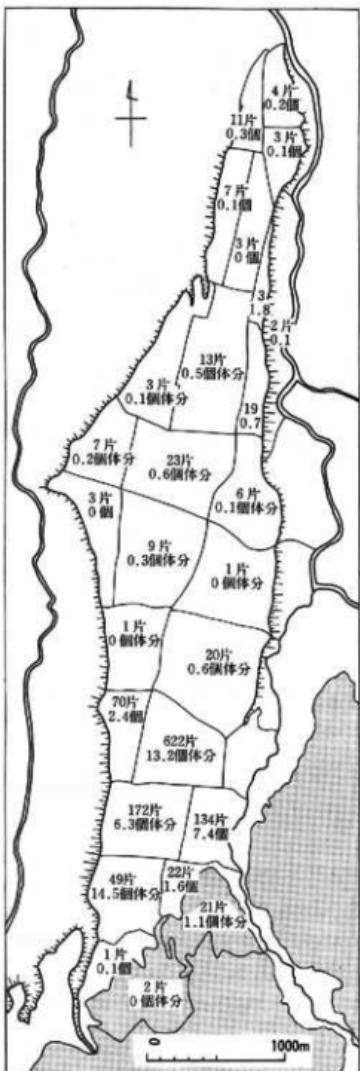
今回の調査では、全地区で2308片の須恵器の破片が採集できた。口縁部で個体数に換算すると、47.6個体分である。その内訳は、杯A身208片・4.5個体分、杯B身322片・8.8個体分、杯



第8図 純文土器の散布状態（縮尺1/40000）



第9図 須恵器の散布状態（縮尺1/40000）



第10図 越中瀬戸の散布状態 (縮尺1/40000)



第11図 その他の遺物の散布状態 (縮尺1/40000)

B蓋350片・18.4個体分、杯A身または杯B身527片・12.1個体分、壺493片・3.5個体分、甕287片・0.3個体分、鉢1片・0個体分、不明120片である。

散布状態をみると、窯跡が存在する上段段丘基部の26区に集中し、更に周辺地区（22・23・24区）に広がっている。段丘の中程には、ほとんど散布しておらず、段丘先端部に若干量が散布する。

（吉田正人）

#### （3）越中瀬戸の散布状態（図版14、第10図）

今回の上段段丘の調査で採集した越中瀬戸焼は、1231片・口縁部52.3個体分であり、器種構成は、灰釉碗23片・口縁部0.7個体分、鉄釉碗86片・4.4個体分、灰釉皿16片・0.7個体分、鉄釉皿53片・1.9個体分、灰釉壺3片・0.1個体分、鉄釉壺58片・6.3個体分、灰釉鉢2片・0個体分、鉄釉鉢3片・1.3個体分、すり鉢69片・4.0個体分、管状陶錐29片・15.6個体分、瓦11片、焼台9片・4.7個体分、匣鉢579片・9.1個体分、匣蓋27片・3.5個体分である。なお図示した図版8の9は駿迎堂経塚出土の鉄釉皿であり、削り出し高台をもつ。また図版8の20~24は23区で採集した鉄釉の碗と管状陶錐である。図版5の7は、26区で採集した高台をもたない灰釉皿である。

以上の資料の分布の中心は、窯跡が密集する下瀬戸から瀬戸の地域（27~29区）であり、全体の約61%である756片を採集した。この地域では、越中瀬戸窯の操業期間のほぼ全期間を通じて製品を製作し続けたためであろう。また新瀬戸古窯跡（18区）においてもかなりの密度で遺物が採集できた。これに対し、窯跡の分布範囲外では段丘北部へ行くにしたがい遺物の散布は稀薄になっていくが、ほとんどの地区に小量は散布する。

なお今回の調査では各窯ごとの遺物を明確に分類しえなかったが、すり鉢の口縁部形態等に型式差があることから、今後の編年作業が可能であると思われる。

（岡本淳一郎）

#### （4）その他の遺物の散布状態（図版14、第11図）

以上で示した遺物以外のものとしては、弥生土器壺2片、古墳時代土師器壺1片、珠洲系陶器甕6片、白瓷系陶器甕1片がある。これらは口縁部がなく、小片であるため、これ以上に年代を限定することは難しい（図版5の9・10）。

弥生・古墳時代に関しては段丘の先端に遺跡があり、当地区が水田の造成によって、削平よりも埋積を受けやすいことを考へるならば、少數の遺物も無視することはできない。ただし集落の中心は低地に移っている可能性もあり、当台地での活動の実態の評価は、もう少し資料の蓄積を待たなければならない。

中世の資料は台地の先端と基部に若干量が散布する。この資料では充分なことは分らないが、当地は中世に越後から立山に参詣する道筋にあたり、台地先端に日中寺、台地基部に上末千坊が所在したと伝える。この地は戦国時代には軍事的にも重要な地点となり、天台・真言宗の信仰の中心となっていた上末千坊は、上杉氏の攻撃によって兵火にかかったという。越中瀬戸窯成立以前の遺跡が散布地の地下に残されている可能性は少なくないであろう。（宇野隆夫）

### 第3章 おわりに

立山町は富山県の中央部から東にのびて長野県に接する細長い形をとり、東西約43km、南北約21kmを測る。その東部には標高約3000mの立山連峰を含み、西は常願寺川、橋津川、白岩川が形成した複合扇状地を経て、標高約10mのデルタに至る。そのためこの地には、約300km<sup>2</sup>の範囲の中に、照葉樹林帯、落葉広葉樹林帯、針葉樹林帯、低木林帯をもち(第1図)、それに伴なう複雑な動物相も存在する。このような環境の中で、旧石器(先土器)時代から現代まで、途絶えることなく人々の生活が営まれてきたことが、従来知られていた考古資料で分ってはいたが、更に精密な分布調査の実施は、地域の歴史の理解に新しい知見を加えるものである。ここでは1985年度の調査の成果をまとめ、来年度以後の調査にそなえることとした。

当台地(舌状台地状の段丘)で採集した遺物の主体をなす土器類をみると、中期を中心とする縄文時代が544片・口縁部1.3個体分、弥生時代2片・口縁部0、古墳時代1片・口縁部0、古代2310片・口縁部47.6個体分、中世7片・口縁部0、近世1231片・口縁部52.3個体分であり、縄文時代と古代及び近世にピークのあることが分る。まずこの三つの時期について検討しよう。

縄文時代の遺跡は台地の縁辺にそって、多數所在する。その分布は台地の基部にまで及ぶが台地北半部周縁に、特に密集している。採集した土器は小片が多いが、時期の分るものは、中期前葉の新崎式と中期後葉の串田新式に属するものが多く、後期初めの氣屋式や加曾利B式併行の土器を少量含む。当台地で確認した17カ所の縄文遺跡が、中期に同時に存在したのか、より少ない集団が移動した結果であるかは検討の余地が多いが、前後の時期に比して人々の活動が著しく盛んであったことは明らかである。その理由は現在の資料からは軽々しく論じることができないが、若干の推測は可能であろう。

当台地は、大河川である常願寺川の氾濫に対して安全であり、両側を流れる橋津川、白岩川から水や魚を得ることができる。また台地の森や台地縁辺の河畔林からは各種の植物質食料とそれに伴なう動物入手できたであろう。ただし、それは当台地が旧石器(先土器)時代以来長く人々の活動の場となった理由と考えうる。当期には当台地を拠点としてもう少し規模の大きな活動がなされたと推測したい。

当台地は立山連峰山麓の複合扇状地内に突出している。この扇状地には縄文時代前期までは遺跡がほとんど立地せず、中期に若干の資料が現われはじめ、後期には遺跡が低地に移る傾向が生じる。照葉樹林帯の扇状地には、樹種の多様な混交林が成育し、安定した食料資源を得ることができるが、縄文時代中期に、当台地を拠点として、扇状地の食料資源を開拓した可能性を考えたい。

また河川を遡ると至近の距離に落葉樹林帯がひろがるが、この食料資源の多い地帯には、集落を営むのに適した台地に乏しい。縄文時代中期以前に、ほとんどの遺跡が高位段丘の縁辺に立地することは、落葉樹林帯での活動が重要であったことを感じさせる。縄文時代中期に、このような活動を停止したとは考えにくいであろう。また標高2000m付近の針葉樹林帯において石礫が採集されていることにも注意したい。

当期の食料の主体をなしたであろう植物質食料に関して、泉拓良氏は労働力の集約と隔年欠果現象という不安定要素の克服をあげ、近畿地方においては多様な植生をもつ扇状地での小数安定型活動、東日本においては異なる環境に立地する大規模集落間の分業的活動によって対処したこと示している。これは近畿地方では落葉樹林帯が山頂付近に限られ、東日本、特に中部地方では住居適地をもつ広い落葉樹林帯と照葉樹林帯とが接するという自然環境を高度に生かしたものであろう。北陸の当地においては、比較的狭い地域で海岸から高山に至り、縄文人が利用した環境のほとんどを小地域に含んでいるといつてよい。この環境に適応した北陸型と呼べる活動がなされたのではないかという点と、それを可能にしたものが現代に近い植生の形成や渡辺誠氏のいう新しい植物質食料加工技術の東日本からの伝播ではなかったかという点を今後、当台地の縄文遺跡を発掘調査する機会を得た場合の重要な課題としておきたい。

古代の土器類の大多数は、上末古窯跡群で生産された8世紀後半から9世紀末ないし10世紀初に至る須恵器である。このほかのものとしては、土師器の甕と鍋の小片が各1片のみある。これらの須恵器の器種構成は食膳具が90.2%を占め、杯Bが杯Aより多い。また貯藏具では壺類が甕より多く、調理具は少い。これらの各器種毎に、いくつかの型式が存在するが、特に杯B蓋では、頂部外面の切離し・調整手法、宝珠形つまみや口縁部の形態の変化により5段階を設定できそうである。今後、当古窯跡を発掘調査する場合には、その編年の確立と器種構成比の把握が基本的な課題となろう。

採集した須恵器から判断すると、法光寺谷・釜谷支群はほぼ同時に操業を開始し、途絶えることなく生産を続け、ほぼ同時に操業を停止している。このことは、当古窯跡群の須恵器生産が、かなりの規模をもち、操業の開始と終末に大きな契機があったことを感じさせる。

当古窯跡群で生産した須恵器の杯B蓋頂部外面には糸切り痕を残すという顕著な特色を示すものがあるが、この特徴をもつものは、郡域を越えた富山県西南端の福光町番人原D遺跡や県東北部黒部川河口の入善町じょうべのま遺跡からも出土している。<sup>16-21-22</sup>今後、当期の各地の須恵器窯跡の製品の特色を抽出し、当地の製品の流通圏を検討しなければならないであろう。

採集した須恵器の内、もっとも新しいものには、焼成の不良なものや、土師質に近いものがあり、当古窯跡群で須恵器を生産しなくなる契機を示している。それは須恵器生産地が移動したためではなく、おそらくは須恵器生産が土師器生産に転換したのであり、それとともに当地で集中的な生産体制をとる必要がなくなったのであろう。

以上の当古窯跡群の動向は、北陸地方や東国の須恵器生産の全体の動きの中で位置づけうる

ものであり、今後の調査や保存に万全を期さなければならない。

越中瀬戸は、前田利家が越中を支配して後、軍事的にも重要であった当地を管理した前田五郎兵衛安勝が、天正18年（1590年）に尾張の陶工である小次郎を呼びよせて創始させたものであるが、それ以前にも瀬戸系の窯が存在したらしい。

採集資料のうち窯との関連を知りうる資料は、伝小次郎窯と、寛永17年（1640年）に開窯した九左衛門窯ないし伊兵衛窯、元禄・宝永年間に開窯し明治10年頃まで続いた甚兵衛窯と伝える窯に関するものである。これらの窯はそれぞれ、大窯、連房式登窯、胴窯という異なる構造をとり、製品にも年代の経過を示すであろう器種構成・型式の変化をみることができる。

これらの資料は発掘されたものではないため、確かなことは言えないが、天目釉碗や印花文灰釉皿をはじめとして、伝小次郎窯の製品の品質が最も高い。また灰釉香炉や灰釉双耳壺のような特殊な器種も目につく。これに対して、以後次第に灰釉施釉の製品が少くなり、茶色に発色する鉄釉を施すものが増加して、胎土も粗悪化する。また、すり鉢やおろし板や管状陶錘等も目立つようになり、民需用品の生産という様相が強まってくる。そして長らく中断していた瓦や硯の生産も始める。

越中瀬戸は台地の全域に散布し、須恵器が主として窯の付近と台地先端部とに散布することと対照的であるが、その多くは非高級品であり、生産の拡大は需要層の拡大を背景にしていたと考えうる。このことは近代に「瀬戸村の住民中には窯場を持たざる者なく」と記される様相を生む。

越中瀬戸窯の成立から現代に至る変容の過程と、製品の流通について、今後より詳しく明らかにできたら、近世史の解明に大きく役立つであろう。

以上で述べた、縄文時代中期・古代・近世の3つの時期は、当台地において特に重要な活動がなされた時代であるが、前章で示したように旧石器（先土器）時代から現代まで、人々の営みは、ほとんど途絶えることなく続いていると考えうる。遺物が少い時期の評価は、今後の資料の増加に留意し、かつ当台地以外を含めた本地域全体の中で再評価しなければならないであろう。

最後に、台地の各地区において何らかの遺物が散布することは、遺跡として標示した地区以外にも遺跡が存在する可能性のあることを示している。本調査の最大の目的は、遺跡の確認と、周知・保存・活用にあり、本報告がその第一歩となれば、目的の過半を達したと言えよう。

（宇野隆夫）

## 参考文献

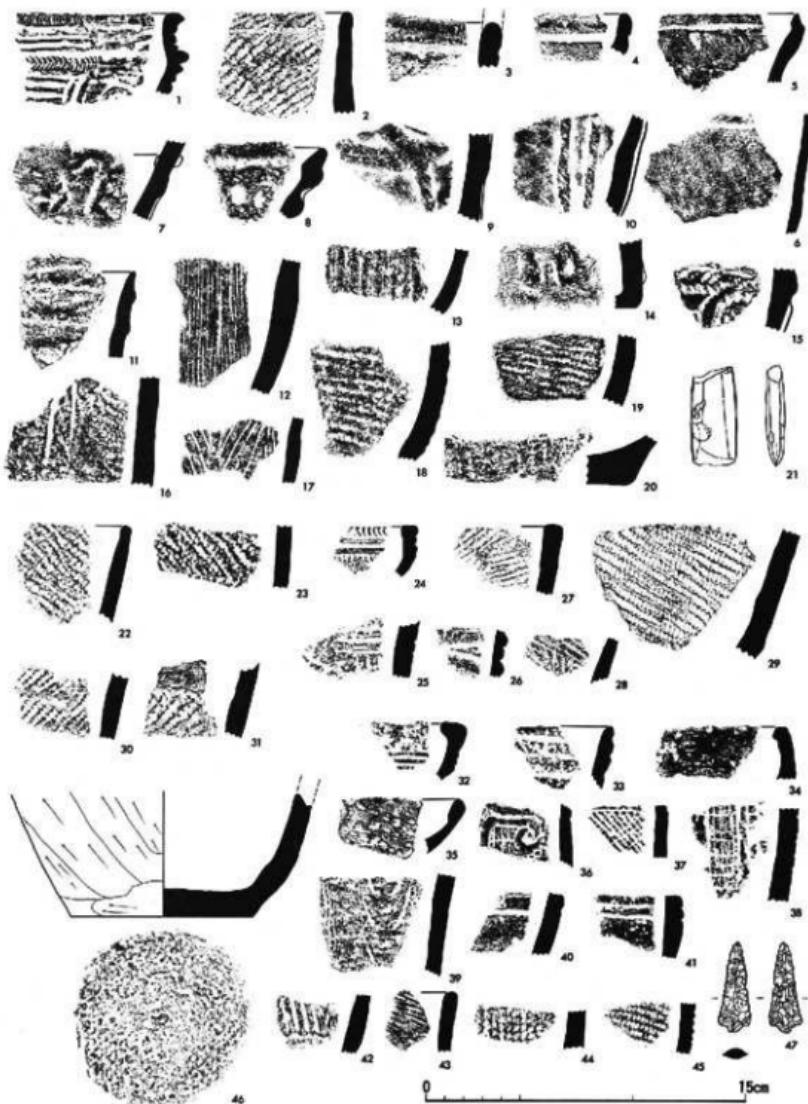
- 1 石川考古学研究会・松任市教育委員会『東大寺領横江庄遺跡』1983年。
- 2 泉拓良「縄文時代のムラ」『縄文から弥生へ』1984年。
- 3 奥村吉信「北陸を舞台とした二万年前の出来事」『考古学研究』第32卷第3号、1985年。
- 4 京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ、1985年。
- 5 定塚武敏「越中の焼きもの」富山文庫2、1974年。
- 6 定塚武敏「越中のやきもの」『日本やきもの集成』4、北陸、1983年。
- 7 立山町教育委員会『立山町史』上巻、1979年。
- 8 立山町教育委員会『立山町史』下巻・別冊、1984年。
- 9 立山町教育委員会『富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要』1979年。
- 10 立山町教育委員会『富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要』1981年。
- 11 立山町教育委員会『富山県立山町白岩戸ノ上遺跡調査概要』(2)、1982年。
- 12 立山町教育委員会『富山県立山町総合公園内野沢狐幅遺跡発掘調査概要』I、1983年。
- 13 立山町教育委員会『富山県立山町総合公園内野沢狐幅遺跡発掘調査概要』II、1985年。
- 14 立山町教育委員会・立山町文化財保護調査委員会『立山町日中墓の段遺跡調査報告書』立山の文化第25号、1974年。
- 15 富山県教育委員会『富山県遺跡地図』1972年。
- 16 富山県教育委員会『入善町じょうべのま遺跡』富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ、1974年。
- 17 富山県教育委員会『立野ヶ原遺跡群』第五次緊急発掘調査概要、1977年。
- 18 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告』立山町遺構編、1981年。
- 19 富山県教育委員会『北陸自動車道遺跡調査報告』立山町土器・石器編、1982年。
- 20 富山県教育委員会『昭和59年度富山県埋蔵文化財調査一覧』1985年。
- 21 入善町教育委員会『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要』(3)、1976年。
- 22 入善町教育委員会『じょうべのま遺跡』C・K区の調査、1985年。
- 23 藤田富士夫「富山県立山古窯跡群」「考古学ジャーナル」No.97、1974年。
- 24 古川知明「立山町白岩尾掛遺跡—縄文時代草創期遺物について—」『大境』第8号、1984年。
- 25 松岡宗次「日中部落と社寺」『立山の文化』第2号、1965年。
- 26 渡辺誠「増補縄文時代の植物食」考古学選書13、1984年。

# 図 版

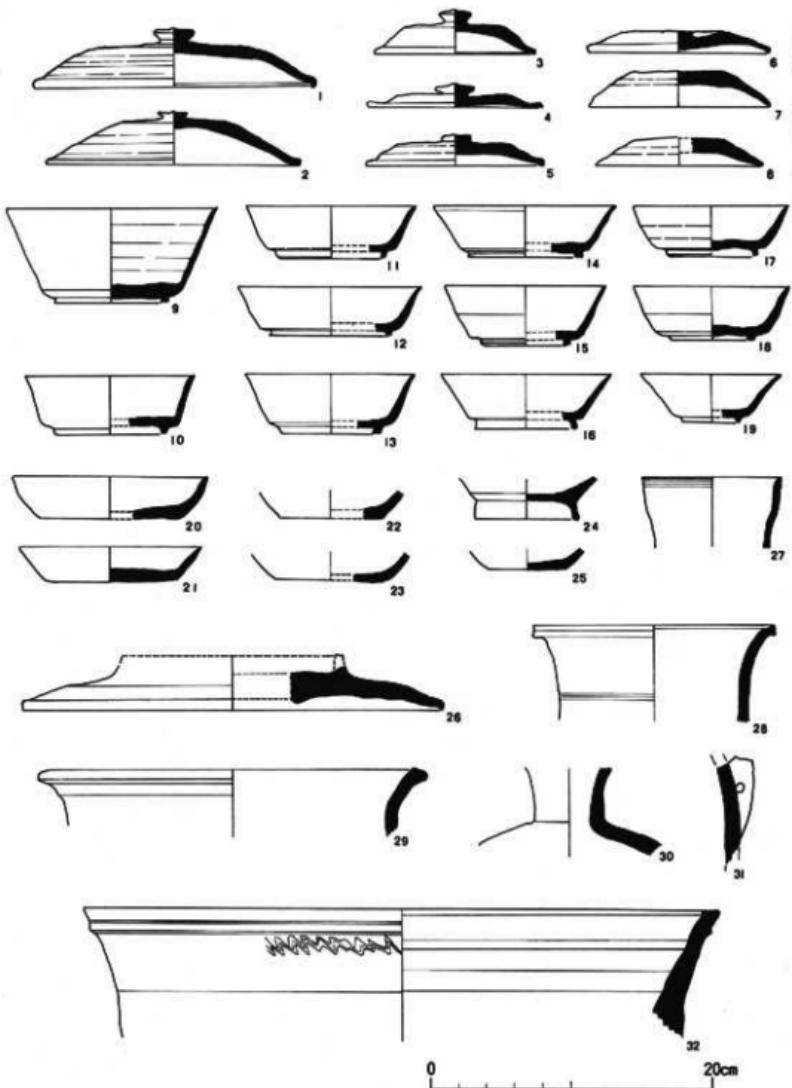
圖版一 一九八五年度分布調查地區 航空寫真（一九八三年攝影）



図版二 遺物実測図(1)

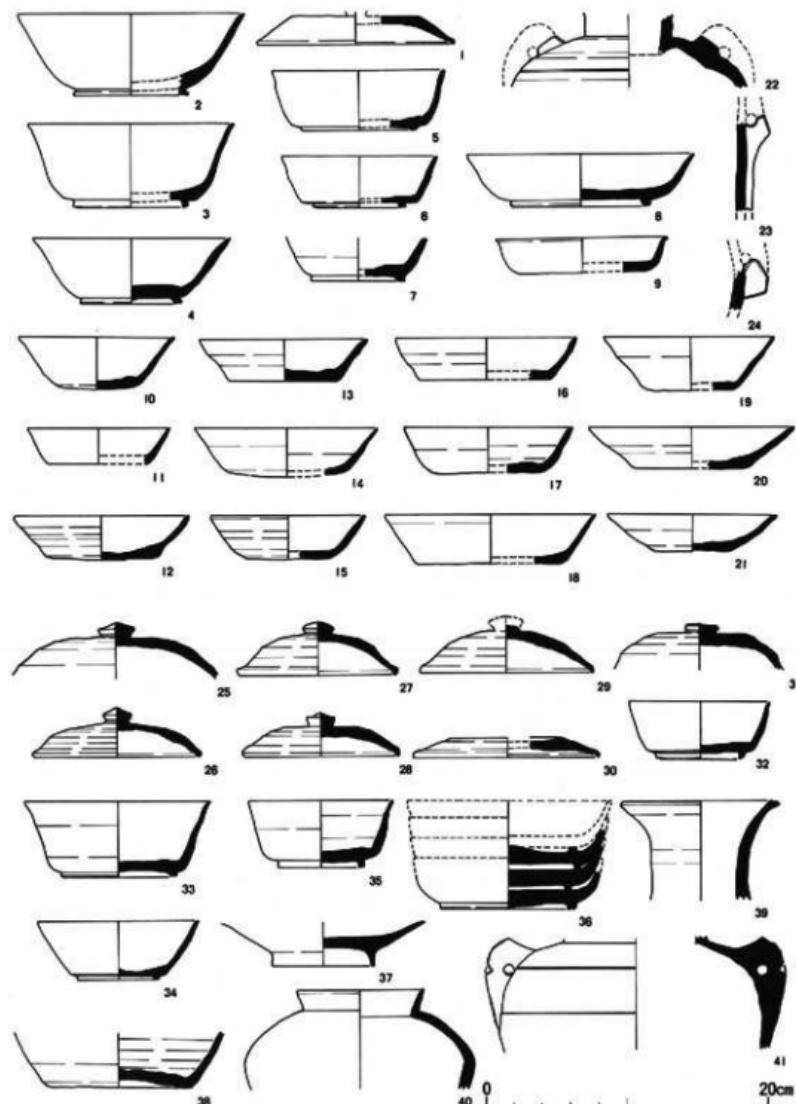


縄文土器・石器 (1:上末遺跡, 2~21:日中墓ノ段遺跡, 22・23:日中墓ノ段北遺跡,  
24~29:野沢龍ヶ鼻遺跡, 30・31:野沢大谷南遺跡, 32~47:野沢大谷北遺跡, 図版9参照)

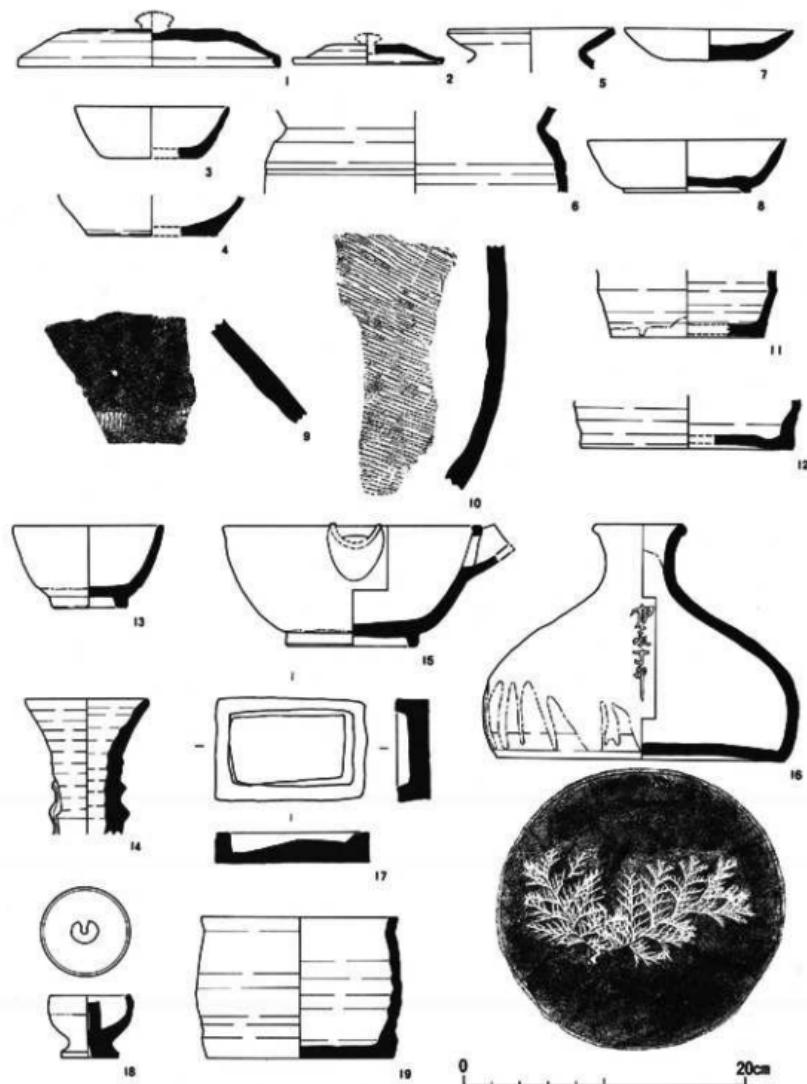


須恵器 (1~32: 上末古窯跡群法光寺谷支群: 敷地1, 図版10参照)

図版四 造物実測図(3)

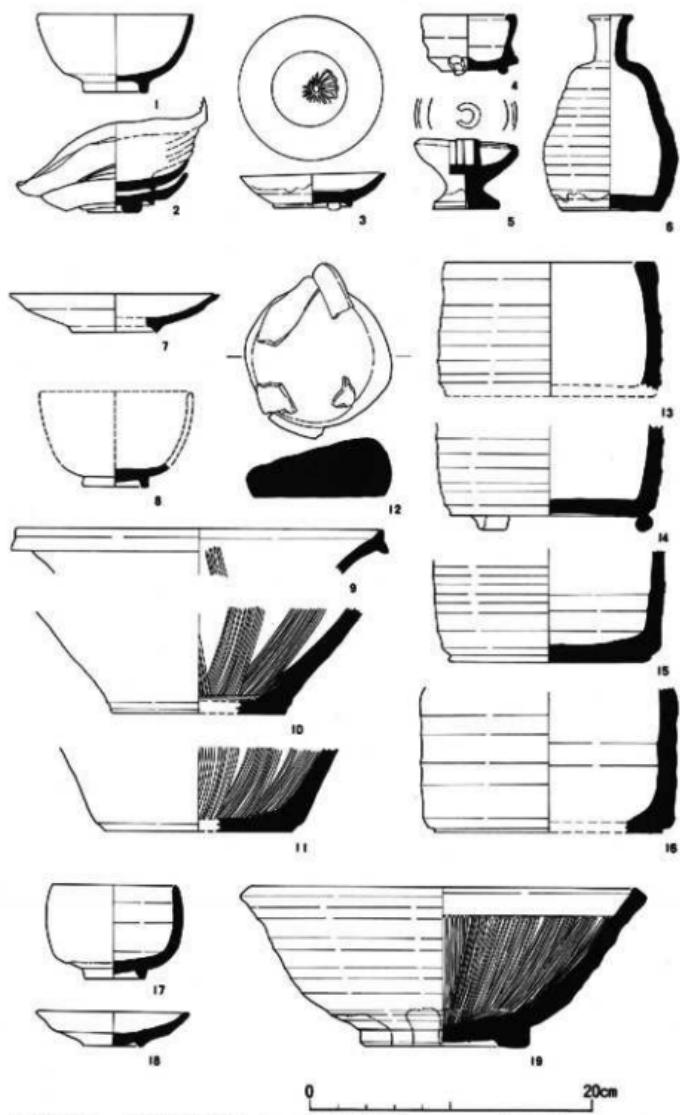


須恵器 (1~21: 法光寺谷1号窯: 大正割窯, 25~41: 伝法光寺谷4号窯, 図版11参照)



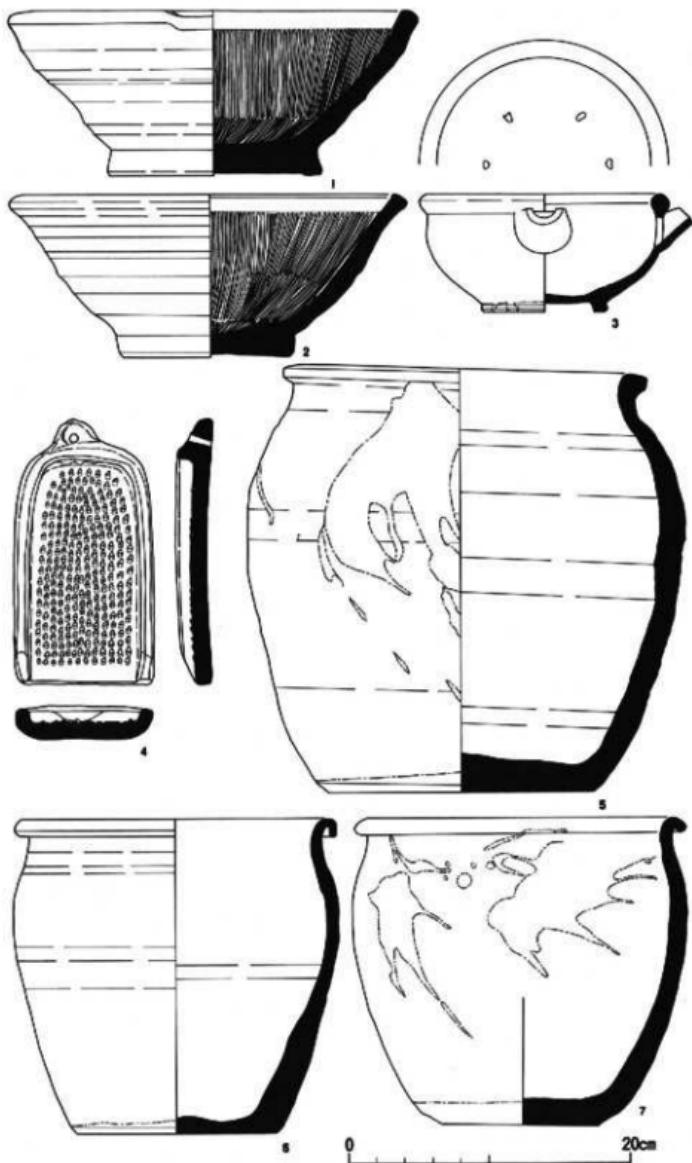
須恵器・中世陶器・越中瀬戸 (1~6:須恵器散布地 3:釜谷支群, 7:出土地不明, 8:出土地不明,  
9:21子地区, 10:11卜地区, 11・12:21市地区, 13~19:出土地不明, 図版12参照)

図版六 遺物実測図(5)

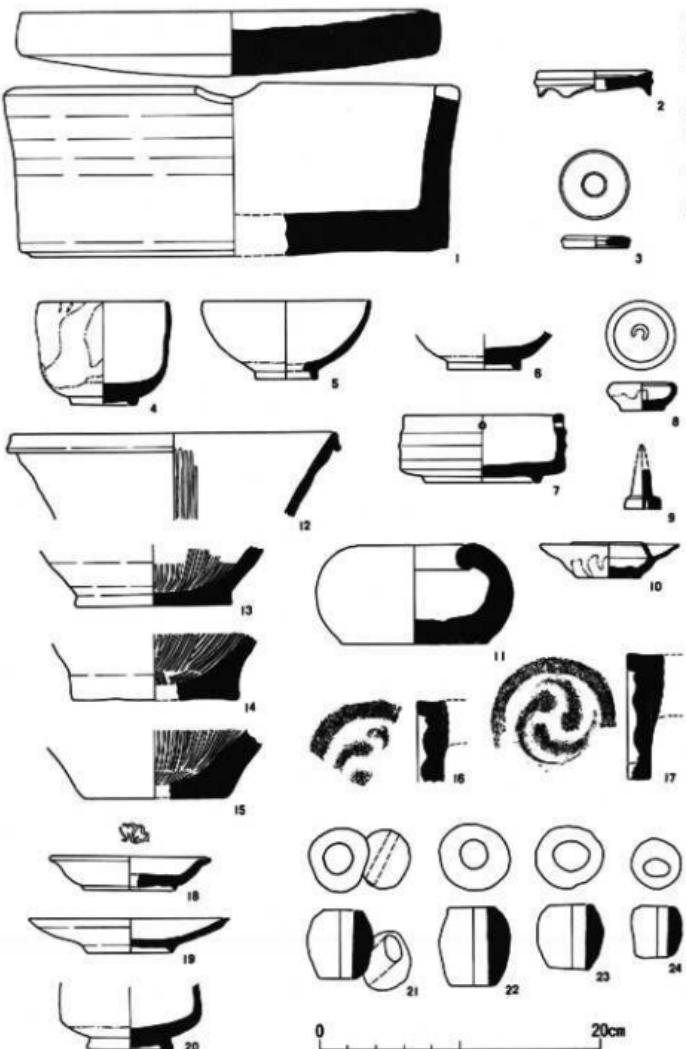


越中瀬戸 (1~6:伝小次郎窯, 7~16:九左衛門窯, 17~19:甚兵衛窯, 図版13参照)

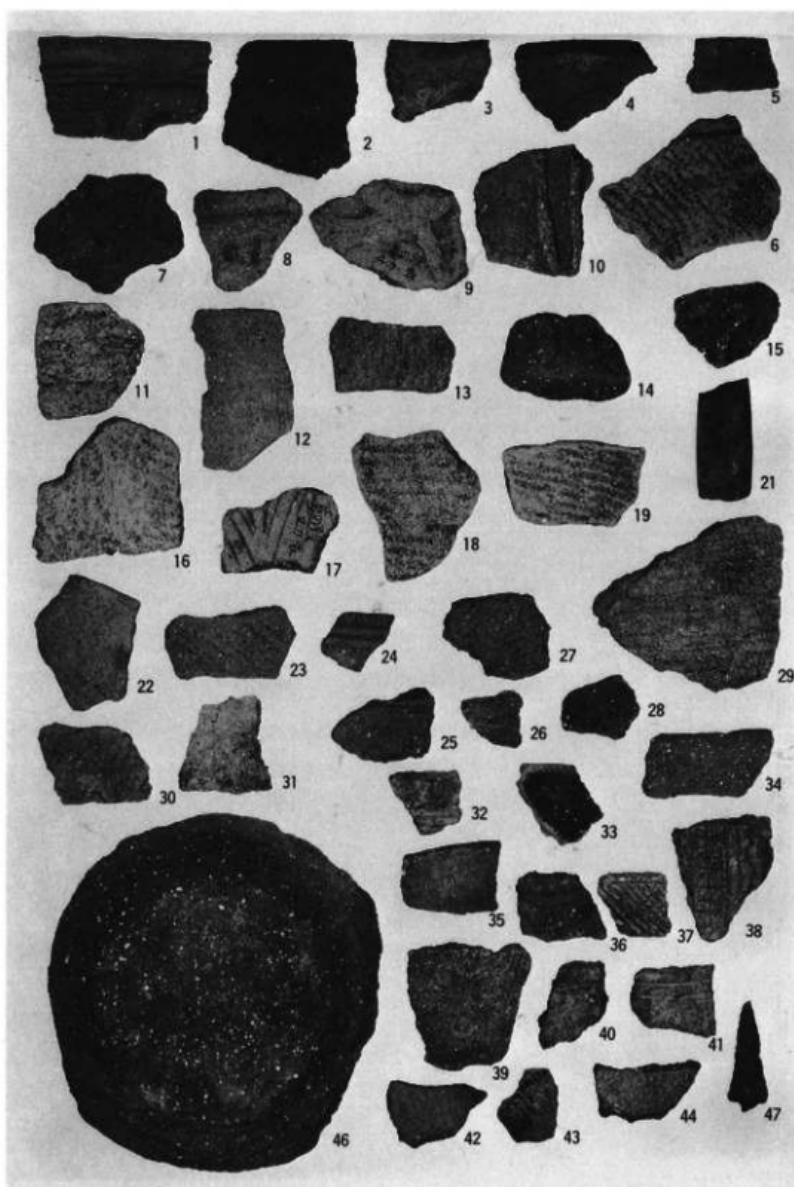
図版七 遺物実測図(6)



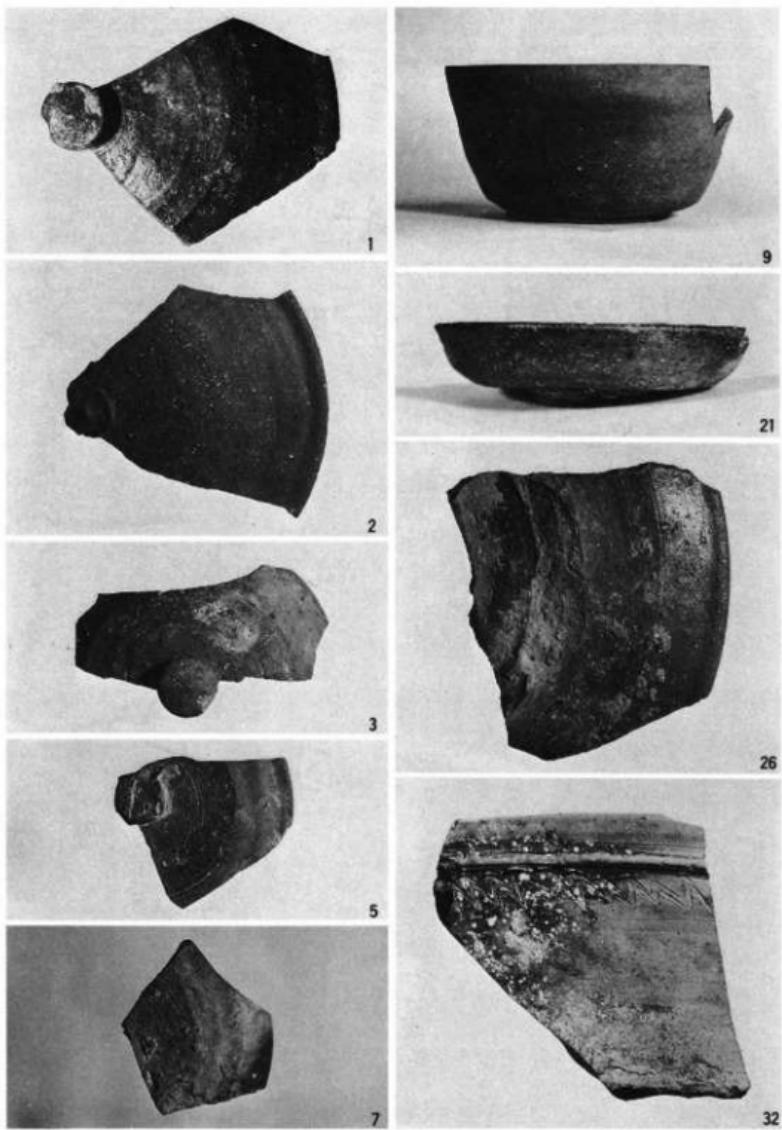
越中瀬戸 (1~7:甚兵衛窯、図版13参照)



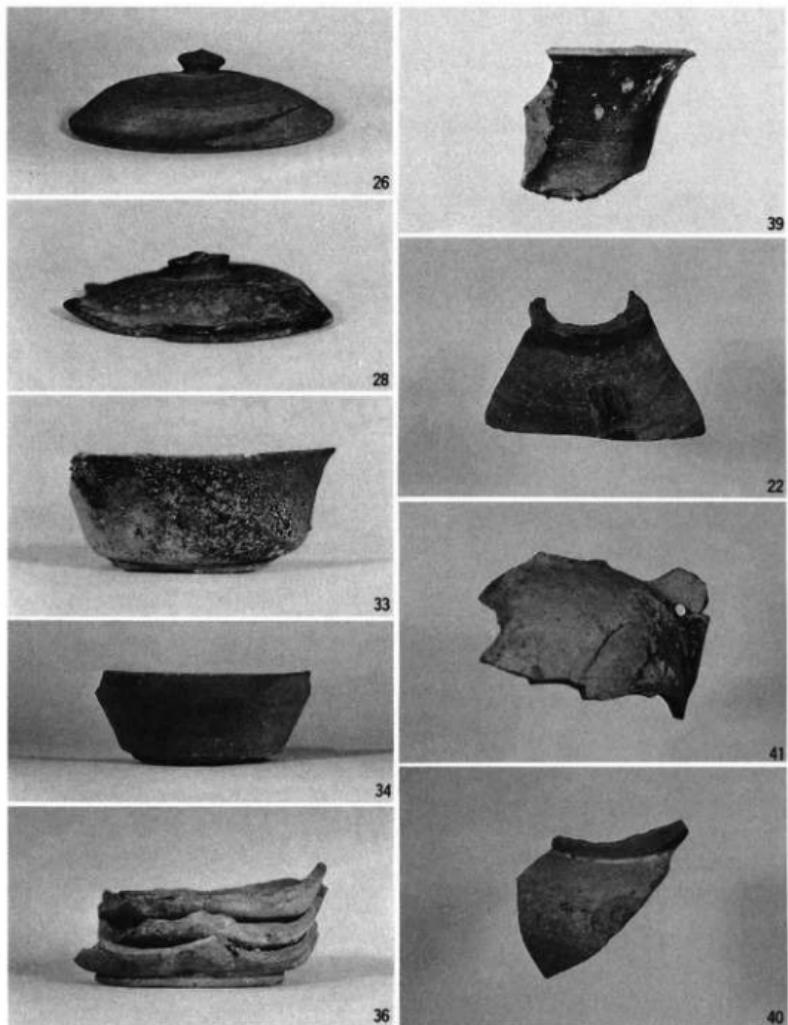
越中瀬戸（1：甚兵衛窯，2：224地区，3：194地区，4～17：198地区，18：32地区，  
19：188地区，20：238地区，21～24：236地区）



縄文土器 (図版2参照)



須恵器 (図版3参照)



須恵器（図版4 参照）



13



16



14



15

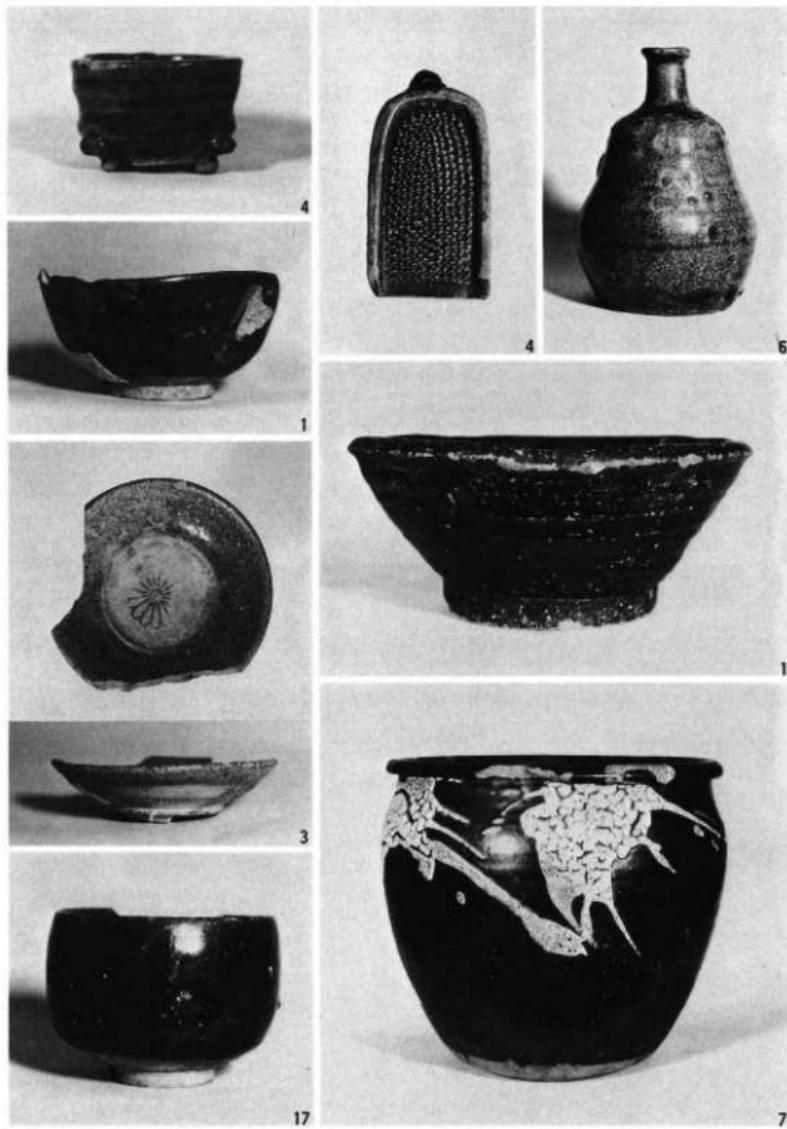


18



19

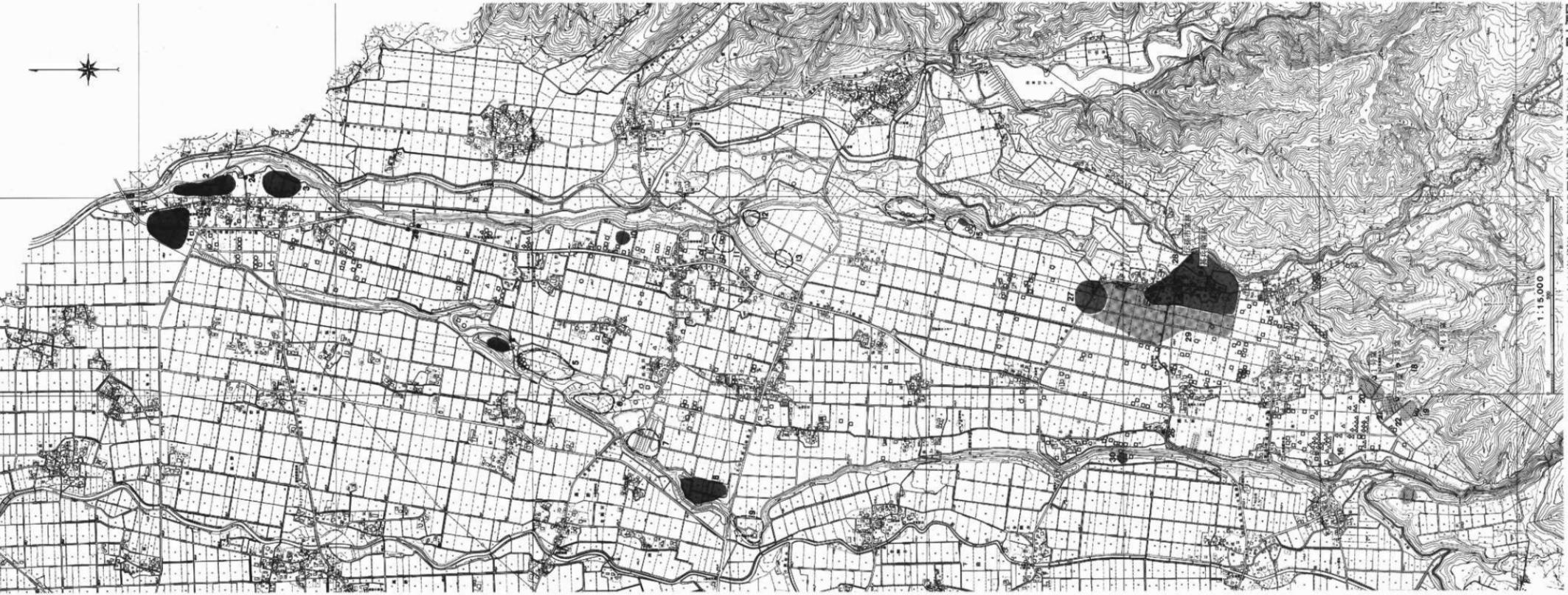
越中瀬戸 (図版5参照)



越中瀬戸 (図版 6・7 参照)

図版一四

一九八五年度分布調査地区の遺跡と遺物採集地点



1986年3月25日 印刷  
1986年3月31日 発行

立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ  
立山町文化財調査報告書第1冊

編集 立山町教育委員会  
発行 富山大学人文学部考古学研究室  
印刷 (有)日本海印刷

